



岩波文庫

小説

竹取物語

島津久基校訂

岩波書店

岩波文庫

525

竹 取 物 語

島津久基校訂



岩波書店

は し が き

竹取物語は現存の古代物語中最古の作品である。そして平安朝の物語文學の始祖であると同時に、我が國小説の鼻祖として、亦、最古の童話文學として、誰でも一度は讀んで置いていゝものである。一箇の物語としても、なか／＼面白いし、古典文學の中でも、短くもあり、且、文章も比較的讀み易い方である。

此の物語に關する先覺の考證や註釋では、契沖阿闍梨の隨筆「河社」中の所説、小山儀の「竹取物語抄」(二卷)、田中大秀の「竹取翁物語解」(六卷)及び加納諸平の「竹取物語考」等を主なものとして擧げ得るが、就中、大秀の研究は最も詳密秀拔なものである。「かぐや姫おひたち」以下「天の羽衣」に至る各章段の名目も、原作には無いのであるが、此の「解」に於て附せられたのを、本書も蹈襲したのである。本文の校訂も主として「解」に據つたが、他に、寛永木活字版本及び佐佐木弘綱著「竹取物語俚諺解」をも照合した。

讀者の興味と便益とに資する爲、附録として、同一の説話を語つてゐる「今昔物語集」の文と、

此の物語の構想の本據として指摘される「寶篋經序品」「河社」「解」等に引く、「榛女祇域因縁經」「解」に引く。「抄」には「奈女耆婆經」を引く及び「月上女經」の文を抄出して掲げてみた。

なほ卷末に、曾て日本文化講座の爲に執筆した拙稿「古代及び中世の小説」の一節、竹取物語に關した部分を、大村書店主の好意によつて轉載することを得、少しばかり筆を加へて本書の解説に代へることにした。

昭和四年五月

島津久基識

目次

かぐや姫おひたち	九
つまどひ	一〇
佛の御石の鉢	一四
蓬萊の玉の枝	一六
火鼠の裘	一七
龍の首の珠	二七
燕の子安貝	三三
御狩のみゆき	三六
天の羽衣	四三

目

次

附錄

一、竹取翁於篁中見付女兒養立語（今昔物語卷三十一・三十三）……………五五

一、廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品（抄錄）……………五七

一、佛說楞女祇域因緣經（抄錄）……………五九

一、佛說月上女經（抄錄）……………六三

解說……………六五

竹
取
物
語

竹取物語

かぐや姫
おひたち

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、

萬づの事に使ひけり。名をば讃岐造磨となむいひける。その竹の中に、

本光る竹一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、

三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝毎夕毎に見る竹の中に、

おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて、手に打入れて家に持ちて來

ぬ。妻の姫に預けて養はす。美しきこと限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁この子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔ててよ毎に、金ある竹を見つく

ること重なりぬ。かくて翁やうく豊になり行く。この兒養ふ程に、すくくと大に

なりまさる。三月許になる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上などさだして、髪

上せさせ裳著す。帳の内よりも出さず、いつきかしづき養ふ程に、この兒の容貌清ら

なること世になく、家の内は暗き處なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ、腹立たしき事も慰みけり。翁竹を取ること久しくなりぬ。勢猛の者になりけり。この子いと大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹の赫映姫とつけつ。此の程三日うちあげ遊ぶ。萬づの遊をぞしける。男女嫌はず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

竹 取 物語



世界の男、貴なるも賤しきも、いかで、この赫映姫を得てしがな見てしがな、と音に聞きめでて惑ふ。その邊の垣にも家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安き寝もねず、闇の夜に出でも穴を抉り、此處彼處より覗き垣間見惑ひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。

人の物ともせぬ處に惑ひ歩けども、何の驗あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて、言ひ懸くれども、事ともせず。邊を離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多

かり。疎かなる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて、來ずなりにけり。その中に
 猶言ひけるは、色好といはるゝ限り五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名、一人
 は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一
 人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しも容貌よ
 しと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫映姫を見まほしうして、物も食は
 ず思ひつゝ、かの家に行きて、佇み歩きけれども、詮あるべくもあらず。文を書きて
 やれども、返事もせず、佗歌など書きてやれども、返しもせず、詮なしと思へども、
 十一月十二月の降り氷り、六月の照り霽くにも障らず來けり。この人々、或時は竹取
 を呼び出でて、「娘を我に賜べ」と伏し拜み、手を擦り宜へど、「己がなさぬ子なれば、
 心にも従はずなむある」といひて、月日を過す。

斯かれは、この人々家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立て、思ひ止めむとすれども
 止むべくもあらず。さりとて遂に男婚はせざらむやは、と思ひて頼を懸けたり。強ち

に志を見え歩く。これを見つけて、翁おきな、赫映姫かぐやひめにいふやう、「我が子この佛ほとけ、變化へんぐゑの人と申しながら、こゝら大おほさまで養おやしひ奉る志疎おろかならず。翁の申さむこと聞き給ひてむや」といへば、赫映姫、「何事をか宣はむ事を承らざらむ。變化へんぐゑの者にて侍りけむ身とも知らず、親おやとこそ思ひ奉れ」といへば、翁、「嬉しくも宣ふものかな」といふ。「翁年七としなな十に餘りぬ。今日けふとも明日あすとも知らず。この世の人は、男は女に婚あふことをす、女は男に婚あふことをす。その後なむ門かども廣ひろくなり侍る。いかでか然る事なくてはおはしまさむ」赫映姫のいはく、「なでふ然る事かし侍らむ」といへば、「變化へんぐゑの人といふとも女めの身持もち給へり。翁のあらむ限りは、斯うてもいますかりなむかし。この人々の年月を経て、斯うのまいましつゝ宣ふ事を思ひ定めて、一人ひとり々々に婚あひ奉り給ひね」といへば、赫映姫いはく、「よくもあらぬ容貌かたちを、深き心も知らで、徒心あだこころつきなば、後悔のちしき事もあるべきをと思ふばかりなり。世の畏かしこき人なりとも、深き志を知らでは婚あひ難がたしとなむ思ふ」といふ。翁いはく、「思おもひの如くも宣ふかな。そもく如何いかやうなる

竹

と承けつ。

取

日暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌を謡ひ、或は唱歌をし、或は嘯

物

を吹き、扇を鳴らしなどするに、翁出でていはく、「辱くも穢けなる所に、年月を経て

語

ものし給ふ事、極まりたる畏まりを申す。『翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宣ふ

君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ』と申せば、『深き御心を知らでは』となむ申す。

さ申すも理なり。『いづれ劣勝おはしまさねば、ゆかしき物見せ給へらむに、御志

の程は見ゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき』といふ。これよき事なり、

人の恨もあるまじ』といへば、五人の人々も、『よき事なり』といへば、翁入りていふ。

赫映姫、石作皇子には、「天然に佛の御石の鉢といふ物あり、それを取りて賜へ」といふ。車持皇子には、「東の海に蓬萊といふ山あなり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。今一人には、「唐土にある火鼠の裘を賜へ。」大伴大納言には、「龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。」石上中納言には、「燕の持たる子安貝一つ取りて賜へ」といふ。取翁、「難き事どもにこそあめれ。この國にある物にもあらず。斯く難き事をば如何に申さむ」といふ。赫映姫、「何か難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出でて、「斯くなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」といへば、皇子達、上達部聞きて、「おいらかに、『邊よりだに、な歩きそ』とやは宣はぬ」といひて、倦じて皆歸りぬ。

佛の御
石の鉢

猶この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天然にある物も持て來ぬものかは、と思ひめぐらして、石作皇子は心のしたくみある人にて、

天竺に二つと無き鉢を、百千萬里の程行きたりととも、いかでか取るべき、と思ひて、
 赫映姫の許には、「今日なむ天竺へ石の鉢とりに罷る」と聞かせて、三年ばかり經て、
 大和國十市郡に、ある山寺に、賓頭盧の前なる鉢の直黒に煤づきたるを取りて、錦の
 袋に入れて、作花の枝につけて、赫映姫の家に持て來て見せければ、赫映姫怪しがり

竹 見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

取 海山の路に心を盡くし果て御石の鉢の涙流れき

物 赫映姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし。

顯 おく露の光をだにぞやどさまし小倉山にて何もとめけむ

とて、返し出すを、鉢を門に棄てて、この歌の返しをす。

白山に逢へば光の失するかと鉢を棄てても頼まるゝかな

と詠みて入れたり。赫映姫返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、言ひ煩ひ
 て歸りぬ。かれ鉢を棄てて又いひけるよりぞ、面なき事をば、はちを棄つとはいひけ

蓬萊の
玉の枝

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、「筑紫國に湯あみに罷らむ」とて、暇申して、赫映姫の家には、「玉の枝取りになむ罷る」といはせて下り給ふに、仕うまつるべき人々、皆難波まで御送しけり。皇子、「いと忍びて」と宣はせて、人も數多率ておはしませず、近う仕うまつる限りして出で給ひぬ。御送の人々見奉り送りて歸りぬ。

おはしましぬと人には見え給ひて、三日許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事皆仰せたりければ、その時一の工匠なりけるうちまろら六人を召し取りて、容易く人寄り來まじき家を作りて、構を三重に仕込めて、工匠等を入れ給ひつゝ、皇子も同じ所に籠り給ひて、知らせ給ひつる限り十六所をかみにくどをあけて、玉の枝を造り給ふ。赫映姫宣ふやうに、違はず造り出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密に持て出でぬ。

「船に乗りて歸り來にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しげなる様して居給へり。迎に人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちて参る。いつか聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちて上り給へり」とのゝしりけり。これを赫映姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべし、と胸潰れて思ひけり。

竹斯かる程に門を叩きて、「車持皇子おはしましたり」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしましたり」といへば、逢ひ奉る。皇子宣はく、「命を捨てて、かの玉の枝持て來たり」とて、「赫映姫に見せ奉り給へ」といへば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に文をぞ附けたりける。

徒らに身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし

これをも哀れと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく、「この皇子に申し給ひし蓬萊の玉の枝を、一つの所もあやしき處なく、あやまたず持ておはしませり。何をもちてか、とかく申すべきにあらず。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずしておはし

ましたり。はやこの皇子に婚ひ仕うまつり給へ」といふに、物もいはず頼杖をつきて、いみじう歎かしげに思ひたり。この皇子、「今さら何かといふべからず」といふまゝに、縁に這ひ上り給ひぬ。翁理に思ふ。「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでか辭み申さむ。人さまもよき人におはす」などいひ居たり。赫映姫のいふやう、「親の宣ふ事を、一向に辭み申さむ事のいとほしさに、得難き物を、ゆかし、とは申しつるを、かく淺ましく持て來る事をなむ、妬く思ひ侍る」といへど、なほ翁は閨の内しつらひ物などす。

語翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ。怪しく麗しくめでたき物にも」と申す。皇子答へて宣はく、「一昨々年の二月の十日比に、難波より船に乗りて、海中に出でて、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふ事成らでは、世の中に生きて何かせむ、と思ひしかば、唯空しき風に任せて歩く。命死なば如何はせむ、生きてあらむ限りは斯く歩いて、蓬萊といふらむ山に逢ふや、と浪に漂ひ漕ぎ歩いて、我が

國の内を離れて歩き廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時には風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。或時には來し方行末も知らず、海に紛れむとしき。或時には糧盡きて、草の根を食物としき。或時にはいはむ方なくむくつけなるもの來て、食ひかからむとしき。或時には海の貝を取りて命をつぐ。旅の空に助くべき人も無き所に、いろ／＼の病をして、行方すらも覺えず。船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時許に、海の中に遙かに山見ゆ。舟の中をなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大にてあり。その山の様高くうるはし。これや我が覓むる山ならむと思へど、流石に恐ろしく覺えて、山の圍を指し廻らして、二三日ばかり見歩くに、天人の粧したる女、山の中より出で來て、銀の金碗をもて水を汲み歩く。これを見て船より下りて、『この山の名を何とか申す』と問ふに、女答へて曰く、『これは蓬萊の山なり』と答ふ。之を聞くに嬉しき事限りなし。この女に、『かく宣ふは誰ぞ』と問ふ。『我が名はほうかむるり』といひて、

ふと山の中に入りぬ。その山を見るに、更に登るべきやうなし。その山の岨づらを廻れば、世の中に無き花の木ども立てり。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それには

いろ／＼の玉の橋渡せり。その邊に照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持てまうで來たりしは、いと惡かりしかども、宜ひしに違はましかばとて、この花を折

りてまうで來たるなり。山は限りなく面白し。世に譬ふべきにあらざりしかど、この

枝を折りてしかば、更に心許無くて、船に乗りて追風吹きて、四百餘日になむまうで

來にし。大願の力にや、難波より昨日なむ都にまうで來つる。更に潮に濡れたる衣を

駈だに脱ぎ更へなでなむ、此方まうで來つる」と宣へば、翁聞きて、打敷きて詠める、

吳竹のよゝの竹取る野山にもさやは侘しき節をのみ見し

これを皇子聞きて、「こゝらの日比思ひ侘び侍りつる心は、今日なむ落居ぬる」と宣ひて、返し、

我が袂今日乾ければ侘しさの千種の數も忘れぬべし

と宣ふ。

斯かる程に、男ども六人連ねて、庭に出で來たり。一人の男、文挾に文を挟みて申す。
「作物所の司の工匠漢部内鷹申さく、玉の木を作りて仕う奉りし事、心を碎きて、千餘日に力を盡くしたる事少からず。然るに祿未だ賜はらず、これを賜はりて、分ちて竹子に賜はせむ」といひて捧げたり。竹取の翁、この工匠等が申すことは何事ぞ、と傾き居り。皇子は我にもあらぬ氣色にて、肝消えぬべき心地して居給へり。これを赫映姫聞きて、「この奉る文を取れ」といひて見れば、文に申しけるやう、

皇子君千餘日賤しき工匠等と諸共に、同じ所に隠れ居給ひて、かしこき玉の枝を作らせ給ひて、官も賜はらむと仰せ給ひき。これを、この比案するに、御使とおはしますべき赫映姫の要じ給ふべきなりけり、と承りて、「この宮より賜はらむ」と申して賜はるべきなり。

といふを聞きて、赫映姫、暮るゝまゝに思ひ侘びつる心地笑み榮えて、翁を喚び取り

ていふやう、「眞に蓬萊の木かところと思ひつれ。斯くあさましき虚事にてありければ、はや疾く返し給へ」といへば、翁答ふ、「定かに造らせたる物と聞きつれば、返さむ事いと易し」と頷き居り。赫映姫の心ゆき果てて、ありつる歌の返し、

眞かと聞きて見つれば言の葉を飾れる玉の枝にぞありける

竹　　といひて、玉の枝も返しつ。竹取の翁然ばかり語らひつるが、流石に覺えて眠り居り。
取　　皇子は、立つもはした、居るもはしたにて居給へり。日の暮れぬれば、すべり出で給
物　　ひぬ。

語　　かの愁訴せし工匠等をば、赫映姫呼びすゑて、「嬉しき人どもなり」といひて、祿い
多く取らせ給ふ。工匠等いみじく喜びて、「思ひつる様にもあるかな」といひて、歸
道にて、車持皇子血の流るゝまでちよろぜさせ給ふ。祿得し證もなく、皆取り捨てさ
せ給ひてければ、逃げ失せにけり。かくて、この皇子、「一生の恥これに過ぐるはあら
じ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見思はむことの恥かしき事」と宣

ひて、唯一所深き山へ入り給ひぬ。ところ宮司侍ふ人々、皆手を分ちて求め奉れども、身
まかりもやし給ひけむ、え見つけ奉らずなりぬ。みこ皇子の御供に隠し給はむとて、年比
見え給はざりけるなりけり。これをなむ、(第 選)たまさかるとはいひ始めける。

竹 取 物



右大臣阿倍御主人は、財豊に家廣き人にぞおはしける。その年渡りける唐
土船の王卿といふ者の許に、文を書きて、「火鼠の裘といふなるもの買

物 けておこせよ」とて、仕う奉る人の中に、心確なるを選びて、小野房守といふ人を附
語 けて遣はす。持て到りて、かの浦に居る王卿に金を取らす。王卿文をひろげて見て、
返事書く。かへりごと

火鼠の裘、我が國に無き物なり。音には聞けども、未だ見ぬ物なり。世にある
物ならば、この國にも持てまうで來なまし。いと難き商なり。然れども、若し天
竺に邂逅に持て渡りなば、もし長者の邊に訪らひ求めむに、無き物ならば、使に

添へて金かねをば返かへし奉らむ。

といへり。かの唐土たうど船來ふねきけり。小野房守おののふさもりまうで來てまう上る、といふことを聞きて、歩み疾あせうする馬うまをもちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乗りて筑紫つくしより唯七日に上りまうで來たり。文を見るに、いはく、

竹取 火鼠ひねずみの裘かはごろも、辛うじて、人を出して求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮は容易たやすく無き物なりけり。昔賢せんき天竺てんぢくの聖ひじり、この國に持て渡りて侍りける、西の山寺さんじにあり、と聞き及びて、公おほやけに申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價あたひの金少かねすくなし、と國司くわくし使に申ししかば、王卿わうけいが物加ものくはへて買ひたり。今金五十兩賜はるべし。船の歸らむにつけて賜たまひ送れ。もし金賜はぬものならば、裘かはごろもの質返しちしたべ。

といへる事を見て、「何思なにおもす。いま金少かねすこしの事にこそあなれ。必ず送るべき物にこそあなれ。嬉うれしくして遣おこせたる哉」とて、唐土たうどの方に向ひて伏し拜み給ふ。

この裘かはごろも入れたる箱はたけを見れば、種々のうるはしき瑠璃るりを綺いろうへて作れり。裘かはごろもを見れば

紺青こんじやうの色なり。毛の末には金の光輝かがやきたり。げに寶たからと見え、うるはしき事比ならぶべき物なし、火に焼けぬ事よりも、清けらなる事比ならびなし。「うべ、赫映姫このの好もしがり給ふにこそありけれ」と宣ひて、「あなかしこ」とて、箱はこに入れ給ひて、物の枝えだにつけて、御身の化粧けさういといたくして、やがて泊とどりなむものぞ、と思おもして、歌詠よみ加へて持ちていしましたり。その歌は、

取 限りなき思ひに焼けぬ 袂かたごろも乾かわきて今日こそは見め

物 といへり。家の門かどに持もて到りて立てり。竹取出で來て取り入れて、赫映姫に見す。赫

語 映姫、かの袂を見ていはく、「うるはしき皮なめり。わきて眞まことの皮ならむとも知らず」。

竹取答へていはく、「とまれかくまれ、先づ請しやうじ入れ奉らむ。世の中に見えぬ袂さまの様なれば、これを眞まことと思ひ給ひぬ。人ないたく侘わびさせ奉らせ給ひそ」といひて、呼びすゑ奉れり。

斯く呼びすゑて、この度は必ず婚おはむ、と軀からだの心にも思おもひ居ゐり。この翁は、赫映姫の

寡^{さみ}なるを歡^{なげ}かしければ、よき人に婚^あはせむと思ひはかれども、切^{せき}に否^{いな}といふことなれば、え強^しひぬは理^{ことわり}なり。赫映姫、翁にいはく、「この裘^{かはごろも}は、火に焼かむに、焼けずはこそ眞^{まこと}ならむと思ひて、人の言ふことにも負けめ。世に無き物なれば、それを眞^{まこと}と疑^{うたがひ}なく思はむと宣へ。猶これを焼きて見む」といふ。翁、「それ然^さも言はれたり」といひて、大臣^{おとぎ}に「斯^{ごと}くなむ申す」といふ。大臣^{おとぎ}答へていはく、「この皮は唐土^{もろこし}にも無かりけるを、辛^{から}うじて覓^{もと}め尋ね得たるなり。何の疑^{うたがひ}かあらむ。」然^さは申すとも、早焼^やきて見給へ」といへば、火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めら／＼と焼けぬ。「さればこそ異^{こと}物の皮なりけり」といふ。大臣^{おとぎ}これを見給ひて、御顔^{おんかほ}は草の葉の色して居^ゐ給へり。赫映姫は、あな嬉しと喜びて居たり。かの詠^よみ給ひける歌の返^{かへ}し、箱に入れて返す。

名残なく燃ゆと知りせばかは衣^{ころも}おもひの外^{ほか}に置きて見ましを
とぞありける。されば歸りいましにけり。世の人々、「安倍大臣^{あべのおとぎ}は、火鼠^{ひねずみ}の裘^{かはごろも}を持^もて
いまして、赫映姫に住み給ふとな。此處^{こゝ}にやいます」など問ふ。或人のいはく、「裘^{かはごろも}

は火にくべて焼きたりしかば、めらくと焼けにしかば、赫映姫婚ひ給はず」といひければ、これを聞きてぞ、利氣なきものをば、あへなしとはいひける。

龍の首の珠

大伴御行の大納言は、我が家にありとある人を召し集めて、宣はく、「龍の首に五色の光ある玉あり。それを取りて奉りたらむ人には、願はむ事を

取叶へむ」と宣ふ。男ども仰の事を承りて申さく、「仰の事はいと尊し。但しこの玉容

物易くえ取らじを、況や龍の首の玉は如何取らむ」と申し合へり。大納言宣ふ、「君の使

語といはむものは、命を捨てても、己が君の仰言をば叶へむとこそ思ふべけれ。この國

に無き天竺唐土の物にもあらず。この國の海山より龍は下り上るものなり。如何に思

ひてか、汝等難き物と申すべき」。男ども申すやう、「さらば如何はせむ。難き物なり

とも、仰言に従ひて求めに罷らむ」と申す。大納言見笑ひて、「汝等君の使と名を流し

つ。君の仰言をば如何は背くべき」と宣ひて、龍の首の玉取りにとて、出し立て給ふ。

この人々の道の糧食物に、殿の内の絹、綿、錢など、ある限り取り出でて添へて遣はす。「この人々ども、歸るまで齋をして我は居らむ。この玉取り得では家に歸り來な」と宣はせけり。おの／＼仰承りて罷り出でぬ。「龍の首の玉取り得ずば歸り來な」と宣へば、いづちも／＼足の向きたらむ方へいなむとす。斯かる好事をし給ふ事、と誘り合へり。賜はせたる物はおの／＼分けつゝ取り、或は己が家に籠り居、或はおのが行かまほしき所へいぬ。親君と申すとも、斯くつきなき事を仰せ給ふ事、と、事ゆかぬもの故、大納言を誘り合ひたり。「赫映姫するむには、例のやうには見にくし」と宣ひて、麗しき屋を造り給ひて、漆を塗り、蒔繪をし、綺へし給ひて、屋の上には糸を染めて、いろ／＼に葺かせて、内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に繪を畫きて、間毎に張りたり。もとの妻どもは皆追ひ拂ひて、赫映姫を必ず婚はむ設して獨り明し暮し給ふ。

遣しし人は、夜晝待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず。心許無がりて、いと忍びて、

唯^と舍^{なり}人^{ふたり}二^に人^{ひと}召^{めい}繼^ぎとして、寢^ふれ給^{たま}ひて、難^な波^はの邊^{はた}におはしまして、問^とひ給^{たま}ふことは、「大^{おほ}
 伴^{とも}大^{だい}納^{のだい}言^{ごん}の人^{ひと}や、船^{ふね}に乘^{のり}りて龍^{たつ}殺^{ころ}して、そが首^{くび}の玉^{たま}取^とれるとや聞^きく」と問^とはするに、
 船^{ふね}人^{びと}答^{こた}へてはいく、「怪^{あや}しき事^{こと}かな」と笑^{わら}ひて、「然^さる業^{わざ}する船^{ふね}もなし」と答^{こた}ふるに、を
 ぢなきこととする船^{ふね}人^{びと}にもあるかな。え知らでかくいふ、と思^{おも}して、「我が弓^{ゆみ}の力^{ちから}は、龍
 あらば、ふと射^い殺^{ころ}して首^{くび}の玉^{たま}は取^とりてむ。遅^{おく}く來^くる奴^{やつ}原^{はら}を待^{まち}たじ」と宣^いひて、船^{ふね}に乘^{のり}
 りて、海^{うみ}毎^{ごと}に歩^あき給^{たま}ふに、いと遠^{とほ}くて、紫^{むら}紫^しの方^{かた}の海^{うみ}に漕^こぎ出^でて給^{たま}ひぬ。如^い何^かしけむ、
 疾^{はや}き風^{かぜ}吹^ふきて、世^せ界^{かい}闇^{くら}がりて、船^{ふね}を吹^ふきもて歩^あく。いづれの方^{かた}とも知^しらず、船^{ふね}を海^{うみ}中^{なか}
 に罷^まり出^でてぬべく吹^ふき廻^まして、浪^{なみ}は船^{ふね}に打^う掛^かけつゝ卷^まき入^いれ、雷^{かみ}は落^おちかゝるやうに
 閃^{ひら}きかゝるに、大^{だい}納^{のだい}言^{ごん}は惑^{まど}ひて、「まだ斯^かかる佗^たしき目^めは見^みず。如^い何^かならむとするぞ」
 と宣^いふ。楫^{かぢ}取^{とり}答^{こた}へて申^{まう}す、「こゝら船^{ふね}に乘^{のり}りて罷^まり歩^あくに、まだ斯^かく佗^たしき目^めを見^みず。
 御^み船^{ふね}海^{うみ}の底^{そこ}に入^いらずば雷^{かみ}落^おちかゝりぬべし。若^もし幸^{さい}ひに神^{かみ}の助^{すけ}あらば、南^{なん}海^{かい}に吹^ふかれ
 おはしぬべし。うたてある主^{ぬし}の御^み許^{もと}に仕^{つか}へ奉^{まつ}りて、すするなる死^しをすべかめるかなし」

とて、楫取泣く。大納言これを聞きて宣はく、「船に乗りては楫取の申すことをこそ、高き山とも頼め。など斯く頼もしげなきことを申すぞ」と青反吐を吐きて宣ふ。楫取答へて申す、「神ならねば何業をか仕らむ。風吹き浪烈しけれども、雷さへ頂に落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求め給ひ候へば、斯くあなり。疾風も龍の吹かするなり。はや神に祈り給へ」といへば、「よき事なり」とて、「楫取の御神聞しめせ。をぢなく心幼く龍を殺さむと思ひけり。今より後は毛の末一筋をだに動かし奉らじ」と、祝詞を放ちて立居、泣く／＼呼び給ふこと、千度ばかり申し給ふけにやあらむ、やう／＼雷鳴り止みぬ。少し明りて、風は猶早く吹く。楫取のいはく、「これは龍の仕業にこそありけれ。この吹く風はよき方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方に赴きて吹くなり」といへども、大納言は、これを聞き入れ給はず。

三四日ありて吹き返し寄せたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息づき臥し給へり。船に在る男ども

國に告げたれば、國の司まうで訪らふにも、え起き上り給はで、船底に臥し給へり。
松原に御筵敷きて下し奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、辛うじて起
き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いと脹れ、此方彼方の目には、李を二
つ附けたるやうなり。これを見奉りてぞ、國の司も微笑みたる。國に仰せ給ひて、腰
竹與作らせ給ひて、によぶく荷はれて家に入り給ひぬるを、いかでか聞きけむ、遣はし
取し男ども参りて申すやう、「龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし。
物玉の取り難かりし事を知り給へればなむ、勘當あらじとて参りつる」と申す。大納言
語起き出でて宣はく、「汝等よく持て來ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこそありけれ。それ
が玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらまし
かば、又事も無く、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。赫映姫てふ大盗人
の奴が、人を殺さむとするなりけり。家の邊だに今は通らじ。男どももな歩きそ」と
て、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉取らぬ者どもに賜びつ。これを聞きて、

離れ給ひし本の上は、腹をきりて笑ひ給ふ。糸を葺かせて造りし屋は、鳶の巢に皆
 咋ひもていにけり。世界の人のいひけるは、「大伴大納言は、龍の首の玉や取りておは
 したる」。「否さもあらず。御眼二つに李の様な玉をぞ添へていましたる」といひけ
 れば、「あな堪へ難」といひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひ始
 めける。

燕の子安貝

中納言石上麻呂は、家に使はるゝ男どもの許に、「燕の巢くひたらば告げ
 よ」と宣ふを、承りて、「何の料にかあらむ」と申す。答へて宣ふやう、「燕
 の持たる子安貝取らむ料なり」と宣ふ。男ども答へて申す、「燕を數多殺して見るに
 だにも、腹に無き物なり。但し子産む時なむ、いかでか出すらむ。はら／＼と、人だ
 に見れば失せぬ」と申す。又人の申すやう、「大炊寮の飯炊ぐ屋の棟のつくの穴毎に、
 燕は巢くひ侍り。それに實ならむ男どもをゐて罷りて、あぐらを結ひて上げて窺は

せむに、そこらの燕つばくらめ子産うまざらむやは。さてこそ取らしめ給はめ」と申す。中納言

喜び給ひて、「をかしき事にもあるかな。もともえ知らざりけり。興きようある事申したり」

と宣ひて、實まなる男をとこども二十人ばかり遣はして、あななひに上げすゑられたり。

殿とのより使隙つかひひまなく賜はせて、「子安貝取こやすがひりたるか」と問はせ給ふ。燕つばくらめも人の數多上あまたのぼり居

竹たけたるに懼おそぢて、巢こに上り來す。斯かる由よしの御返事おんかへりごとを申しければ、聞き給ひて、如何いかす

取とべきと思しめし煩わづらふに、かの寮つかさの官人くわんにんくらつ鷹たかと申す翁おきな申すやう、「子安貝取らむと思

物ものしめさば、たばかり申さむ」とて御前おんまへに参りたれば、中納言額ひたひを合はせて對むかひ給へり。

語ことくらつ鷹たかが申すやう、「この燕つばくらめの子安貝は、悪しくたばかりて取らせ給ふなり。さて

はえ取らせ給はじ。あななひにおどろくしく二十人の人の上りて侍れば、あれて寄

りまうで來こすなむ。せさせ給ふべきやうは、このあななひを毀こぼちて、人皆退しりぞきて、實ま

ならむ人ひとり一人を荒籠あらこに載せすゑて、綱を構へて、鳥の子産うまむ間に綱を釣り上げさせ

て、ふと子安貝を取らせ給はむなむよかるべき」と申す。中納言宣ふやう、「いとよき

事なり」とて、あななひを毀ちて、人皆歸りまうで來ぬ。

中納言、くらつ鷹に宣はく、「燕はいかなる時にか子を産むと知りて、人をば上ぐべき」と宣ふ。くらつ鷹申すやう、「燕は子産まむとする時は、尾をさうげて、七度廻りてなむ、産み落すめる。さて七度廻らむ折引上げて、その折子安貝は取らせ給へ」と申す。中納言喜び給ひて、萬づの人にも知らせ給はで、密に寮にいまして、男どもの中に交りて、夜を晝になして取らしめ給ふ。くらつ鷹斯く申すを、いといたく喜び給ひて宣ふ、「こゝに使はるゝ人にもなきに、願を叶ふる事の嬉しさ」と宣ひて、御衣脱ぎて被け給ひつ。「更に夜さりこの寮にまうで來」と宣ひて遣はしつ。

日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、誠に燕巢作り。くらつ鷹申すやうに、尾をさうげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、「物も無し」と申すに、中納言、「悪しく探れば無きなり」と腹立ちて、「誰ばかりおぼえむ」とて、「我登りて探らむ」と宣ひて、籠に乗りて釣られ登りて窺ひ

給へるに、燕尾をさゝげていたく廻るに合はせて、手を捧げて探り給ふに、手に平める物觸る時に、「我物握りたり。今は下してよ。翁しえたり」と宣ひて、集りて疾く下さむとて、綱を引過ぐして、綱絶ゆる即ち、八島の鼎の上に仰様に落ち給へり。人あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目は白眼にて臥し給へり。人々御口に水を掬ひ入れ奉る。辛うじて息出で給へるに、又鼎の上より、手とり足とりしてさげ下し奉る。辛うじて、「御心地は如何思さる」と問へば、息の下にて、「ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握り持たれば、嬉しく覺ゆるなり。先づ脂燭さして來。この貝顔見む」と、御ぐし擡げて御手をひろげ給へるに、燕のまり置ける古囊を握り給へるなりけり。それを見給ひて、「あな詮な業や」と宣ひけるよりぞ、思ふに違ふ事をば、かひなしとはいひける。

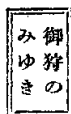
貝にもあらず、と見給ひけるに、御心地も違ひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず。御腰は折れにけり。中納言は、幼稚たる業して病むことを、人に聞かせじとし

給ひけれど、それを病やまひにていと弱くなり給ひにけり。貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを、日に添へて思ひ給ひければ、ただに病やみ死ぬるよりも、人聞まき恥かしく覺え給ふなりけり。これを赫映姫かぐやひめ、聞きて訪たづらひに遣はしける歌、

年を経て浪立ち寄らぬ住のえのまつかひなしと聞くは眞まことか

竹とあるを讀みて聞かす。いと弱こゝろき心地に頭擡かしらもちげて、人に紙かみを持たせて、苦しき心地に取から辛うじて書き給ふ。

物かひは斯くありけるものを侘び果てて死ぬる命いのちを救ひやはせぬ
書と書き果つると絶たえ入り給ひぬ。これを聞きて、赫映姫少し哀れと思おもしけり。それよりなむ、少し嬉しき事をば、かひありとはいひける。



さて、赫映姫容貌世かぐやひめかたちに似すめでたきことを、帝聞みかどきこしめして、内侍中臣ないしなかとみのふさ子のたまに宣ふ、「多くの人の身を徒いたづらになして婚あはさなる赫映姫は、いかばか

りの女ぞと罷りて見て参れ」と宣ふ。ふさ子、承りて罷れり。竹取の家に長まりて請
 じ入れて逢へり。姫に内侍宣ふ、「仰言に、赫映姫の容貌優におはすとなり。よく見て
 参るべきよし宣はせつるになむ参りつる」といへば、「さらば斯くと申し侍らむ」とい
 ひて入りぬ。赫映姫に、「はやかなの御使に對面し給へ」といへば、赫映姫、「よき容貌
 にもあらず。いかでか見ゆべき」といへば、「うたても宣ふかな。帝の御使をばいかで
 か疎かにせむ」といへば、赫映姫答ふるやう、「帝の召して宣はむこと、畏しとも思は
 ず」といひて、更に見ゆべくもあらず。産める子のやうにはあれど、いと心恥かしげ
 に、疎かなるやうにいひければ、心のまゝにもえ責めず。姫、内侍の許に歸り出でて、
 「口惜しくこの幼き者は、強く侍る者にて、對面すまじきと申す」と。内侍、「必ず見奉
 りて参れ、と仰言ありつるものを、見奉らではいかでか歸り参らむ。國王の仰言を、
 まさに世に住み給はむ人の、承り給はではありなむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、
 詞恥かしくいひければ、これを聞きて、まして赫映姫聞くべくもあらず。「國王の仰

言を背かば、はや殺し給ひてよかし」といふ。

この内侍歸り参りて、このよしを奏す。帝聞しめして、「多くの人を殺してける心ぞかし」と宣ひて、止みにけれど、猶思しめしおはしまして、この女の言にや負けむと思しめして、竹取の翁を召して仰せ給ふ、「汝が持て侍る赫映姫奉れ。顔貌よしと聞しめして、御使を賜びしかど、詮なく見えすなりにけり。斯くたいぐしくやは慣らはすべき」と仰せらる。翁畏まりて御返事中すやう、「この女の童は、絶えて宮仕つかうまつるべくもあらず侍るを、もて煩ひ侍り。さりとて罷りて仰せ賜はむ」と奏す。これを聞しめして仰せ給ふやう、「などか翁の手におほし立てたらむものを、心に任せざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠をなどか賜はせざらむ。翁喜びて家に歸りて、赫映姫に談らふやう、「斯くなむ帝の仰せ給へる。猶やは仕う奉り給はぬ」といへば、赫映姫答へて曰く、「もはら然様の宮仕つかう奉らじと思ふを、強ひて仕う奉らせ給はば、消え失せなむす。御官冠つかう奉りて死ぬばかりなり」。翁答ふる

やう、「なし給ひそ。官冠つかさかうかんむりも、我が子を見奉らでは何にかはせむ。さはありとも、な
どか官仕みやづかへをし給はざらむ。死に給ふやうやはあるべき」といふ。「猶虚言それごとかと、仕つかう
奉まつらせて、死なずやあると見給へ。數多あまたの人の志疎おろそかならざりしを、空わなしくなしてし
こそあれ。昨日今日帝きふけふの宣はむ事につかむ、人間ひとやさし」といへば、翁答へて曰く、
「天あめの下したの事はとありともかゝりとも、御命おんいのちの危きこそ大なる障さほなれ。猶仕つかう奉るま
じき事を、参りて申さむ」とて、参りて申すやう、「仰おほせの事の畏かしこさに、かの童わらはを参らせ
むとて仕つかう奉れば、『官仕みやづかへに出し立てなば死ぬべし』と申す。造鷹みやつこまろが手に産うませたる
子にてもあらず。昔山むかしやまにて見つけたる。斯かれば心こころはせも世の人に似ずぞ侍る」と奏
せさす。

帝仰せ給はく、「造鷹みやつこまろが家は山本やまもと近かなり。御狩みかりの行幸みゆきし給はむやうにて見てむや」と
宣のたまはす。造鷹みやつこまろが申すやう、「いとよき事なり。何か心もなくて侍らむに、ふと行幸ゆき
して御覽ごらんぜられなむ」と奏すれば、帝俄に日を定めて、御狩みかりに出で給ひて、赫映姫くわえいひめの

家に入り給ひて見給ふに、光満ちて清らにて居たる人あり。これならむと思して近く
 寄せ給ふに、逃げて入る袖を捉へ給へば、面を塞ぎて候へど、初よく御覽じつれば、
 類なくめでたく覚えさせ給ひて、許さじとすとて、率ておはしまさむとするに、赫映
 姫答へて奏す、「おのが身は、この國に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ。いと率ておは
 し難くや侍らむ」と奏す。帝、「などか然あらむ、猶率ておはしまさむ」とて、御輿を
 寄せ給ふに、この赫映姫、きと影になりぬ。果敢なく口惜しと思して、實にたい人に
 はあらざりけり、と思して、「さらば御供には率ていかじ。もとの御形となり給ひね。
 語 それを見てだに歸りなむ」と仰せらるれば、赫映姫もとの形になりぬ。帝、猶めでた
 く思しめさるゝ事堰きとめ難し。斯く見せつる造磨を悦び給ふ。さて仕うまつる百
 官の人々に、饗應厳しう仕う奉る。帝、赫映姫を留めて歸り給はむ事を、飽かず口惜
 しく思しけれど、魂を留めたる心地してなむ、歸らせ給ひける。御輿に奉りて後
 に、赫映姫に、

歸るさのみゆき物うく思ほえて背きて留まるかぐや姫ゆゑ
御返事を、
御んかへりごと

葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の臺をも見む
むぐら うてな

これを帝御覽じて、いとど歸り給はむ空もなく思さる。御心は更に立ち歸るべくも思
されざりけれど、さりとて夜を明し給ふべきにもあらねば、還らせ給ひぬ。常に仕
奉る人を見給ふに、赫映姫の傍らに寄るべくだにあらざりけり。他人よりは清らなり
物と思しける人の、かれに思し合はすれば人にもあらず、赫映姫のみ御心に懸かりて、
語 唯一人過し給ふ。よしなくて御方々にも渡り給はず。赫映姫の御許にぞ、御文を書き
て通はさせ給ふ。御返事流石に憎からず聞え交し給ひて、面白き木草につけても、御
歌を詠みて遣はす。
うた よ つか

天の羽衣

かやうにて、御心を互に慰め給ふ程に、三年ばかりありて、春の初より、

赫映姫、月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたる様なり。或人の、

「月の顔見るは忌む事」と制しけれども、ともすれば人間には月を見ていみじく泣き

給ふ。七月の望の月に出で居て、切に物思へる氣色なり。近く使はるゝ人々、竹取の

翁に告げていはく、「赫映姫例も月を哀れがり給ひけれども、この比となりては、たゞ

事にも侍らざめり。いみじく思ひ歎く事あるべし。よく見奉らせ給へ」といふを

聞きて、赫映姫にいふやう、「なでふ心地すれば、斯く物を思ひたる様にて月を見給ふ

ぞ、うましき世に」といふ。赫映姫、「月を見れば、世の中心細く哀れに侍り。なでふ

物をか歎き侍るべき」といふ。赫映姫のある所にいたりて見れば、猶物思へる氣色な

り。これを見て、「あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふこ

とも無し。物なむ心細く覺ゆる」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物

思す氣色はあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずてはあらむ」とて、猶、月出づれば、

出で居つゝ歎き思へり。夕暗には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、猶時々は打歎き泣きなどす。これを、使ふ者ども、「猶物思す事あるべし」と私言けど、祝を始めて何事とも知らず。

八月の望ばかりの月に出で居て、赫映姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。赫映姫泣くゝいふ、「さきさきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて、打出で侍りぬるぞ。己が身は、この國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりければ、この月の望に、かの本の國より迎に人々まうで來むす。さらす罷りぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひて、いみじう泣く。翁、「こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、榮種の大さおはせしを、我が丈立ち竝ぶまで養ひ奉りたる我が子を、

何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「我こそ死なめ」とて、泣きのゝしることいと堪へ難げなり。赫映姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、斯くこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事も覺えず。此處には斯く久しく遊び聞えて馴らひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年比馴らひて、立ち別れなむことを、心はへなどあてやかに美しかりつることを見慣らひて、戀しからむことの堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

この事を帝きこしめして、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に竹取出で逢ひて、泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈り、目も爛れにけり。翁今年は五十許なりけれども、物思には片時になむ老になりにけると見ゆ。御使、仰言とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、眞にか」と仰せ給ふ。竹取泣くく申す、

「この望もちになむ、月の都より赫映姫ひかりへの迎むかひにまうで來くなる。尊たふとく問とはせ給ふ。この望もちには人々賜たまはりて、月の都の人まうで來くば、捉とらへさせむ」と申す。御使みつかひ歸り参りて、翁の有様申して、奏そうしつる事ども申すを、聞きこしめして宣ふ。「一目見給ひし御心みこころにだに忘れ給はぬに、明暮見馴あけくれみれたる赫映姫をやりては、如何思ふべき」。かの十五日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國せうしやうたかののおほくにといふ人を差して、六衛ろくゑの司合つかさはせて、二千人の人に竹取が家に遣つかはす。家に罷りて築地ついでちの上に千人、屋の上に千人、家の人々と多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭ゆみやを帶たいして居り。母屋もやの内には女共をうたどもを番ばんに居すゑて守らす。姫おきな、塗籠ぬりごめの内に赫映姫を抱いだかへて居り。翁も塗籠ぬりごめの戸を鎖さして戸口に居ゐり。翁のいはく、「斯ばかり守る所に、天の人にも負けむや」といひて、屋やの上に居る人々にいはく、「つゆも物空ものそらに翔かけらば、ふと射殺いころし給へ」。守る人々のいはく、「斯ばかりして守る所に、蝙蝠かはばり一つだにあらば、まづ射殺いころして外に晒さらさむと思ひ侍る」といふ。翁これを聞きて、頼もしがり居り。

これを聞きて、赫映姫は、「鎖し籠めて守り戦ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。斯く鎖し籠めてありとも、かの國の人來ば皆開きなむとす。相戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ」。翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して眼を掴み潰さむ。さが髪を取りてかなぐり落さん。さが尻を掻き出でて、許多のおほやけ人に見せて恥見せむ」と腹立ち居り、赫映姫はいはく、「聲高にな宣ひそ。屋の上に居る人どもの聞くに、いとまसानし。長いますかりつる志どもを思ひも知らで、罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契りの無かりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親達の顧みを聊かだに仕う奉らで、罷らむ道も安くもあるまじきに、月比も出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、斯く思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむ事の、悲しく堪へ難く侍るなり。かの都の人はいと清らにて、老いもせずなむ、思ふことも無く侍るなり。然る所へ罷らむするも、いみじくも侍らず、

竹 取 物 語

老い衰へ給へる様を見奉らざらむこそ戀しからめ」といひて泣く。翁、「胸痛き事なし給ひそ。麗しき姿したる使にも障らじ」と妬み居り。

斯かる程に宵打過ぎて、子の時ばかりに、家の邊晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十合はせたるばかりにて、在る人の毛の孔さへ見ゆる程なり。大空より人雲に乗りて下り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に魔るゝやうにて、相戦はむ心も無かりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取り立てむとすれども、手に力も無くなりて、痿え屈りたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外さまへ往きければ、荒れも戦はで、心地唯癡れに癡れてまもり合へり。立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛車二つ具したり。羅蓋差したり。その中に王と覺しき人、「家に造鷹まうで來」といふに、猛く思ひつる造鷹も、物に酔ひたる心地して俯しに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、聊かなる功德を翁作りけるによりて、汝が助にとて片時の程とて降ししを、そこの

年比としごとそこらの金賜こまねひて、身を更へたるが如くなりたり。赫映姫は、罪つみを作り給へりければ、斯く賤いやしきおのれが許もとに暫しおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、斯く迎むかふるを、翁おきなは泣き歎なげく、能あたはぬ事なり。はや返し奉かへれ」といふ。翁答へて申す、「赫映姫を養ひ奉ること、二十年餘りになりぬ。片時かたときと宣ふに、怪あやしくなり侍りぬ。又他處とどころに赫映姫と申す人ぞ、おはしますらむ」といふ。「此處こゝに御座おはする赫映姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事かへりごとは無くて、屋やの上に飛車とぶくるまを物寄せて、「いざ赫映姫、穢きたなき所にいかで久しくおはせむ」といふ。立て籠こめたる所の戸、即ちたゞ開あきに開あきぬ。格子かうしどもも人は無くして開あきぬ。姫抱おうないだきて居たる赫映姫外とに出でぬ。え留とどむまじければ、唯さし仰あふぎて泣き居をり。竹取心惑こころまどひて泣き伏せる所に寄りて、赫映姫いふ、「こゝにも心にもあらで斯く罷るに、昇のぼらむをだに見送り給へ」といへども、「何なにしに悲しきに見送り奉らむ。我をば如何いかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具ぐして率みておはせぬ」と泣きて伏せれば、御心みこころ惑ひぬ。「文ふみを書き置きて罷らむ。

戀しからむ折々、取り出でて見給へ」とて、打泣きて書くことは、

この國に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで待るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返す／＼本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見棄て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。

竹と、書き置く。

取天人の中に持たせたる筈あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ。穢き所の物食しめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取り出でて著せむとす。その時に赫映姫、「暫し待て」といひて、「衣著つる人は心異になるなり。物一言いひ置くべき事あり」といひて文書く。天人遅しと心許無がり給ふ。赫映姫、「物知らぬ事な宜ひそ」とて、いみじく靜かに、朝廷に御文奉り給ふ。周章てぬ様なり。

斯く數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで来て、取り率て罷りぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかう奉らずなりぬるも、斯く煩はしき身にて侍れば、心得ず思しめしつらめども、心強く承らずなりにし事、無禮げなるものと思しめし止められぬるなむ、心に留まり侍りぬる。

竹　とて、

取　今はとて天の羽衣著るをりぞ君を哀れと思ひ出でぬる

物　とて、壺の藥添へて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取り

語　つれば、ふと天の羽衣打著せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。

この衣著つる人は、物思も無くなりければ、車に乗りて百人許天人具して昇りぬ。

その後翁姫、血の涙を流して惑へど詮なし。あの書き置きし文を読みて聞かせければ、

ど、「何せむにか命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし」とて、薬も食はず、やがて起きも上らず病み臥せり。中將人々を引具して歸り参りて、赫映姫をえ戦ひ留め

竹取物語終

すなりぬる事を細々と奏す。藥の壺に御文添へて參らす。展げて御覽じて、いといたく哀れがらせ給ひて、物も食しめさず、御遊なども無かりけり、大臣、上達部を召して、「何れの山か天に近き」と問はせ給ふに、或人奏す、「駿河の國にある山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

竹 逢ふことも涙に浮ぶ我が身には死なぬ藥も何にかはせむ

取 かの奉れる不死の藥の壺に、御文具して御使に賜はす。勅使には、調の岩笠といふ人を召して、駿河の國にあなる山の頂に持て行くべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう語 教へさせ給ふ。御文不死の藥の壺竝べて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山とは名づけける。その煙、未だ雲の中へ立ち昇るとぞいひ傳へたる。

附

錄

竹取翁於ニ篁中ニ見ニ付女兒養立語

附

錄

55

今昔□天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ 竹ヲ取テ籠ヲ造テ要スル人ニ與ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケル 翁籠ヲ造
ガラム爲ニ篁ニ行キ竹ヲ切ケル 篁ノ中ニ一ノ光リ有リ 其ノ竹ノ節ノ中ニ三寸許ナル人有リ 翁此レヲ見テ思ハク
我レ年來竹取ニツル 今此ル物ヲ見付タル事ヲ喜テ 片手ニハ其ノ小キ人ヲ取リ 今片手ニ竹ヲ荷テ家ニ返テ
妻ノ嬭ニ篁ノ中ニシ此ル女兒ヲコ見付タル云バケレ 嬭モ喜テ初ハ籠ニ入レテ養ニ 三月許養ニ 例ノ人ニ成ヌ
其ノ兒漸ク長大スルマ 世ニ並无ク端正ニシ 此ノ世ノ人トモ不ニ思エザリケ 翁嬭彌ヨ此レヲ悲ビ愛シテ傳ケル
間ニ 此ノ事世ニ聞エ高ク成テケ 而間 翁亦竹ヲ取ガラム爲ニ篁ニ行ヌ 竹ヲ取ルニ其ノ度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付
タリ 翁此レヲ取テ家ニ返ヌ 然レバ翁忽ニ豐ニ成ヌ 居所ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住ミ 種々ノ財庫倉ニ充テ
滿テリ 眷屬衆多ニ成ヌ 亦此ノ兒ヲ儲テヨ後ハ 事ニ觸レテ思フ様也 然レバ彌ヨ愛シ傳ク事无限シ 而ル間
其ノ時ノ諸ノ上達部殿上人消息ヲ遣テサウシケ 女更ニ不レ聞レバケ 皆心ヲ盡シテ云セケ 女初ニハ空ニ鳴ル
雷ヲ捕ヘテ將來レ其ノ時ニ會ハム云ケリ 次ニハ優曇花ト云フ花有ケリ 其レヲ取テ持來レ 然ラム時ニ會ハム云ケ
リ 後ニハ不レ打ヌニ鳴ル鼓ト云フ物有リ 其レヲ取テ得サセタ折ニ自ラ聞エム云テ不レ會レバケ 假借スル人々女ノ
形ノ世ニ不レ似ズ微妙カリケ 耽テ 只此ク云フニ隨テ 難レ堪キ事ナレ 舊ク物知タル人ニ此等ヲ可レ求キ事ヲ問

ヒ聞テ 或ハ家ヲ出テ海邊ニ行キ 或ハ世ヲ弃テ山ノ中ニ入り 此様ニシテ求ケル程ニ 或ハ命ヲ亡シ或ハ不ニ返
 來ニヌ輩モ有ケリ 而ル間 天皇此ノ女ノ有様ヲ聞シ食シテ 此ノ女世ニ並无ク微妙シト聞ク 我レ行テ見テ實
 ニ端正ノ姿バ速ニ后ニセ思シテ 忽ニ大臣百官ヲ引將テ彼ノ翁ノ家ニ行幸有ケリ 既ニ御マシ着ニル 家ノ有様
 微妙ナル事 王ノ宮ニ不レ異ズ 女ヲ召出ルニ即チ參レリ 天皇此レヲ見給ニ 實ニ世ニ可レ譬キ者无ク微妙カリケ
 此レハ我ガ后ニ成ラム人ニハ不ニ近付ナメリト喜ク思食テ ヤガテ具シテ宮ニ返テ后ニ立テム宣フニ 女ノ申サク
 我レ后ト成ニ无レ限キ喜ビ也ト云ヘド 實ニハ人ニハ非ヌ身ニテ候フ也ト 天皇ノ宣ク 汝然レバ何者ゾ
 鬼カ神カト 女ノ云ク 己レ鬼ニモ非ズ 神ニモ非ズ 但己ヲバ只今空ヨリ人來テ可レ迎キ也 天皇速ニ返ラセ
 給ヒキ 天皇此レヲ聞給テ 此ハ何ニ云フ事ニカ有ラム 只今空ヨリ人來テ可レ迎キニ非ズ 此レハ只我ガ云フ事
 ヲ辭ヒム云ナメ思給ケル程ニ 暫許有テ空ヨリ多ノ人來テ 興ヲ持來テ此ノ女ヲ乗セテ空ニ昇リ 其ノ迎ニ來レル
 人ノ姿此ノ世ノ人ニモ不レ似ザリ 其ノ時ニ天皇 實ニ此ノ女ハ只人ニハ无キ者ニコ有クレ思シテ 宮ニ返リ給ニケ
 其ノ後ハ 天皇彼ノ女ヲ見給ニ實ニ世ニ不レ似ズ形チ有様微妙レバ 常ニ思シ出テ破无ク思シケレ 更ニ甲
 斐无クテ止リニケ 其ノ女遂ニ何者ト知ル事无シ 亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケム 惣ベテ不ニ心得ニヌ事
 也トナ 世ノ人思ケル 此希有ノ事バレ 此ク語り傳ヘタトヤ

廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經 (抄錄)

附

大唐天竺三藏菩提流志奉 詔譯

錄

(上略)爾時衆中有ニ金剛手菩薩摩訶薩。頂ニ禮。釋迦牟尼如來。合掌恭敬白佛言。世尊。今此塔中諸如來等。從レ何而有。從レ何而來。佛言。汝今諦聽。當ニ爲レ汝說。乃往古昔不可思議無量無數阿僧祇劫。此瞻部洲中多ニ諸人衆。安穩豐樂。五穀不レ種自然成熟。人無レ彼我。亦無ニ積貯。當此之時無レ有ニ佛名。有ニ一大山。名寶山王。彼寶山中有ニ三仙人。一名寶髻。二名金髻。三名金剛髻。彼三仙人繫心專念ニ佛法僧寶。復作ニ是念。我等何時證ニ無上正覺。度脫一切諸衆生等。時彼仙衆作ニ是念。已。須臾默然。復起。前念。由ニ是念。故即證ニ慈悲歡喜。一切衆生種種樓閣三摩地。獲ニ於天眼。觀ニ彼上方。見ニ淨居天。復於ニ空中。有レ聲音。曰。善哉正士善哉正士。能發ニ上

願求大正覺。汝曾聞不。有大妙法名廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼。往昔如來已曾演說。善爲利益。一切衆生。諸有聞者決定不退。無上正覺。(中略)此陀羅尼有如是等無量無邊不可思議力。時彼仙人得法歡喜欣慶踊躍。於其住處如新醍醐消沒於地。卽於沒處而生三竹。七寶爲根金莖葉竿梢枝之上皆有眞珠。香潔殊勝。常有光明。往來見者靡不欣悅。生滿十月。便自裂破。一一竹內各生一童子。顏貌端正。色相成就。時三童子亦既生已。各於竹下結加趺坐。入諸禪定。至第七日。於其夜中皆成正覺。其身金色。三十二相八十種好圓光嚴飾。時彼三竹一一變成高妙樓閣。(下略)

(卷上、序品第二)

佛說栴女祇域因緣經 (抄錄)

後漢安息國三藏安世高譯

如^キレ是我^レ聞^キ。一時佛在^{シテ}羅閱祇國^ニ。(中略)座中^ニ有^リ一比丘尼^ノ名曰^フ栴女^ト。即從^テ座起^テ。整^ヘ服^ヲ作^シ禮長跪叉手^{シテ}。白^{シテ}佛言^ニ。世尊^ヲ。我自念^{フニ}。先世生^{レテ}波羅栴國^ニ。爲^リ貧女人^ト。時世^ニ有^リ佛^ノ名曰^フ迦葉^ト。時與^ニ大眾^ノ圍繞說法^{シテ}。坐^{シテ}聞^キ經歡喜^ニ。意欲^ス布施^{セント}。顧^{ムニ}無^レ所^ニ有^リ。自惟^ラ貧賤^{ナリ}。心用^テ悲感^ス。詣^{リテ}他園圃^ニ。求^ニ果^ヲ。當^ニ以^テ施^レ佛^ニ。時得^ニ一栴大^ト。而香好^{ナルヲ}。擎^{ササゲテ}一盂^ヲ。水并^ニ栴一枝^ヲ。奉^ル迦葉佛^ニ及^ヒ諸^ノ衆僧^ニ。佛知^リ至意^ヲ。呪願^{シテ}受^ケ之^ヲ。分布^{シテ}。水栴^ヲ一切周普^ニ。緣^ニ此福祚^ニ。壽盡^{ハテ}生^{シテ}天^ニ。得^ル爲^ム天^ノ后^ト。下^ニ生世間^ニ。不^レ由^リ胞胎^ニ。九十一劫生^ス栴華中^ニ。端正鮮潔^{ニシテ}。常識^ニ宿命^ヲ。今值^{ヒテ}二世尊^ニ。開^ス示道^ヲ。眼^ヲ。(中略)栴女禮^シ已還^ル坐^ス。

佛在^レ世時^ニ。維耶梨國國王苑中自然生^ニ一椶櫚^ノ。枝葉繁茂^シ。實又加^ニ大^ニ。既^ニ有^ニ光色^ノ。香美^シ。非凡^ニ。王寶愛^ニ此椶櫚^ノ。自^レ非^ニ中宮尊貴美人^ノ。不^レ得^ニ啖^ニ。此椶果^ノ。國中有^ニ梵志居士^ノ。財富無數^シ。一國無雙^ニ。又聰明博達才智超^ニ群^ノ。王重愛^ニ之用^ノ。爲^ニ大臣^ノ。王請^ニ梵志^ノ飯食^ヲ。食畢^シ以^ニ一椶實^ノ與^ニ之^ニ。梵志見^ニ椶香美非凡^ノ。乃問^ニ王曰^ク。此椶樹下實有^ニ小栽^ノ可^レ得^ニ乞^ニ不^レ。王曰。大多^ニ小栽^ノ。吾恐^ニ妨^ニ其大樹^ノ。輒除^ニ去^ニ之^ニ。卿若欲^ニ得^ニ今當^ニ相與^ニ。即以^ニ一椶栽^ノ與^ニ梵志^ノ。梵志得^ニ歸種^ニ之朝夕灌溉^シ。日日長大枝條茂好^シ。三年^ニ生實^シ。光彩大小如^ニ王家椶^ノ。梵志大喜^シ。自念^ニ我家資財無數^シ。不^レ減^ニ於王^ノ。唯無^ニ此椶^ノ以^ニ爲^ニ不^レ如^ニ。今已得^ニ之^ニ。爲^ニ無^ニ減^ニ王^ノ。即取^ニ食^ニ之^ニ。而大苦澁^シ。了不^レ可^レ食^シ。梵志更大愁惱^シ。乃退思惟^シ。當^ニ是^ニ十無^ニ肥潤^ノ故^ニ耳^ノ。乃捉^ニ取^ニ百牛^ノ之亂^ニ以飲^ニ一牛^ノ。復取^ニ此一牛乳^ノ。煎^ニ之爲^ニ醍醐^ノ。以灌^ニ椶根^ノ。日日灌^ニ之到^ニ至明年^ノ。實乃甘美^シ。如^ニ王家椶^ノ。而椶樹邊忽復生^ニ一瘤節^ノ。大如^ニ手拳^ノ。日日增長^シ。梵志心念^ニ。忽有^ニ此瘤節^ノ。恐^ニ妨^ニ其實^ノ。適欲^ニ所去^ニ。恐^ニ復傷^ニ樹^ノ。連日思惟^シ。遲徊未決^シ。而節中忽生^ニ二枝^ノ。正指^ニ上向^ノ。洪直調好^シ。高出^ニ樹巔^ノ。去^ニ地七丈^ノ。其杪乃分作^ニ諸枝^ノ。周圍旁出^シ。形如^ニ偃蓋^ノ。花葉茂好勝^ニ於本樹^ノ。梵志怪^ニ之。不^レ知^ニ枝上當何所有^ノ。乃作^ニ棧閣^ノ登而視^ニ之^ニ。見^ニ枝上偃蓋之中^ノ。乃有^ニ池水^ノ。既清^シ且香^シ。又有^ニ衆華^ノ。彩色鮮明^シ。披^ニ視^ニ華下^ノ。有^ニ一女兒^ノ在^ニ池水中^ノ。梵志抱取^ニ歸養^ニ長^ニ之^ニ。名^ニ曰^ニ椶女^ノ。

至^ニ年十五^ニ・顔色端正^{ナルコト}・天下無雙^{ナリ}・宜聞^{キコユ}遠國^ニ・有^リ七國王^ニ同時俱來^ニ・詣^リ梵志所^ニ・求^ム下嬬^ヲ・榛女^ヲ以爲^ス・夫人^ト・梵志大恐怖^{シテ}・不知^レ當^ニ以^テ與^フ誰^ニ・乃^チ於^ニ園中^ニ架^{シテ}一高樓^ヲ・以^テ榛女^ヲ著^レ上^ニ・出^テ謂^フ諸王^ニ・曰^ク・此女非^{ハズ}我所^ニ生^ス・自出^ツ於^ニ榛樹之上^ニ・亦不^レ知^ル・是天龍鬼神^ノ女耶^カ・鬼魅之物^{ナルカ}・今七王求^ム之^ヲ・我設^シ與^ニ一王^ニ・六王當^ニ怒^ム・不^レ敢愛惜^ス也^ニ・女今在^リ園中樓上^ニ・諸王便^チ自平議^{シテ}・有^レ應得^ル者^ニ・便自取^リ去^ル・非^ズ我所^ニ制^ス也^ニ・於是七王口^ニ共爭^フ之^ヲ・紛紜^ト未^レ決^セ・至^リ其夜^ニ・瓶沙王從^リ伏濱中^ニ入^リ・登^リ樓就^レ之^ニ共宿^ス・明晨當^リ去^ル・榛女白^ク曰^ク・大王幸枉^ニ威尊^ヲ・接^ニ建^ス於我^ニ・今復相捨而去^ル・若其有^レ子^ニ・則是王種^{ナリ}・當^ニ何所付^ス・王曰^ク・若是男兒^{ナラバ}・當^ニ以還^レ我^ニ・若是女兒^{ナラバ}・便以與^レ汝^ニ・王則脫^ニ手金銀之印^ヲ・以付^テ榛女^ニ・以^レ是爲^レ信^ト・便出^テ語^フ群臣^ニ言^ク・我已得^テ榛女^ヲ與^ニ一宿^ス・亦無^シ奇異^{ナルコト}・故如^ニ凡人^ニ・故不^レ取^ツ耳^ト・瓶沙軍中皆稱^ス萬歲^ヲ・曰^ク我王已得^ニ榛女^ヲ・六王聞^レ之^ヲ・便各還去^ル・瓶沙王去^リ後・遂便有^レ娠^ス・時榛女勅^{シテ}守門人^ニ言^ク・若有^ニ求^レ見^ル我者^ニ・當^ニ語^フ言^ク我病^ト・後日月滿^テ生^ル一男兒^ヲ・顏貌端正^{ナリ}・兒生^レ則手持^テ針藥囊^ト・梵志曰^ク・此國王之子^ニ・而執^シ醫器^ヲ・必醫王^{ナリ}也^ニ・(中略) 名^ヲ曰^ク・

祇城・(中略)

又榛女生^ル時^ニ・國中復有^リ須漫女及波曇女^ト・亦同時俱生^ス・須漫女者生^ス於須漫華中^ニ・國有^リ迦羅越家^ニ・

常^ニ竿^{シボリテ}須^ニ漫^ヲ以爲^ニ香膏^ト。竿^ニ膏^ヲ石邊忽^ニ作^ス癰節^ヲ。大如^シ彈丸^ヲ。日日長大^{シテ}至^リ如^ク手拳^ニ。石便爆破^シ。見^ル石節之中有^レ聚^ム。聚如^シ螢火^ヲ。射出^{シテ}墮^レ地^ニ。三日^{ニシテ}而生^ス須漫^ヲ。又三日^{ニシテ}成^ス華^ヲ。華舒^ニ中有^ニ小女^ヲ。兒^ニ迦羅越取^{リテ}養^フ之^ヲ。名^ヰ曰^フ須漫女^ヲ。長大姝好^ヲ。及才明智慧亞^ニ次^ニ椽女^ニ。爾時又有^ニ梵志家^ニ浴池^ニ中自然生^ス青蓮華^ヲ。華特加大^{ナリ}。日日長益^{シテ}如^シ五升瓶^ヲ。華舒見^ル中有^ニ女兒^ヲ。梵志取^{リテ}養^フ之^ヲ。名^ヰ波雲女^ヲ。長大又好^シ。才明智慧如^シ須漫女^ヲ。諸國王聞^{キテ}此^ノ女顏容絕世^{ナリト}。交^{リテ}來^ム求^ム。求^ム之^ヲ。二女曰^ク。我生^ム不由^レ胞胎^ニ。乃出^テ草華之中^{ヨリ}。是與^ニ凡人^ニ不同^シ。何宜^シ當^ニ隨^{ヒテ}世人^ニ。乃復嫁^ス耶^ヤ。(下略)

佛說月上女經 (抄錄)

隋天竺三藏法師闍那崛多譯

附

錄

63

如^キ是^ノ我^レ聞^キ。一時佛在^ニ毗耶離國大樹林中草茅精舍^ニ。與^ニ大比丘五百人^ニ俱^ニ。皆阿羅漢^{ナリ}。復有^ニ菩薩
八千人^ニ俱^ニ。皆是大德^{ナリ}。有大威力^ニ。有大神通^ニ。悉皆受持^{シテ}諸陀羅尼^ヲ。得^ニ無礙辯^ヲ。得^ニ諸禪定^ヲ。得^ニ
無生忍^ヲ。具足五通^ヲ。所言真實^{ニシテ}。無^レ有^ニ虛妄^{ナリ}。離^ニ諸罣礙^ヲ。於^ニ已眷屬及以利養^ニ。悉不^ニ染著^セ。不^レ求^ル
報^ヲ。故爲^レ人說^{シテ}法^ヲ。得^ニ深法忍^ヲ。能度^ニ彼岸^ニ。具足無畏^ヲ。已過^ニ魔事^ヲ。無^レ有^ニ業結^ヲ。於^ニ諸法性^ニ。無^レ有^ニ
疑滯^ニ。無量百千那由他劫修行成就^{セリ}。恒以^ニ悅色^ヲ。慰^ニ喻^{シテ}行者^ヲ。終無^ニ嚙齷^{スルコト}。善巧辭句。心不^ニ變改^セ。辯
說無窮^{ナリ}。亦皆成就^{セリ}平等忍法^ヲ。能於^ニ大家^ニ說法無畏^{ナリ}。說^ニ一法句^ヲ。過^ニ百千億那由他劫^ヲ。得^ニ巧方便
無盡智慧^ヲ。知^ニ諸三世^ヲ。猶如^ニ幻化^ニ。亦如^ニ陽焰^ニ。如^ニ水中月^ニ。如^ニ夢^ニ。如^ニ星如^ニ空谷響^ニ。知^ニ諸法性空^ヲ
無相願^ニ。心常寂滅^{セリ}。住^ニ眞如法^ニ。離^ニ諸取捨^ヲ。既得^ニ無量智巧方便^ヲ。亦知^ニ衆心所行智巧方便之事^ヲ。隨^ニ
所化處^ニ。悉皆能爲演^{シテ}說^ス諸法^ヲ。於^ニ衆生心^ニ。無^レ有^ニ損害^ヲ。離^ニ諸愛染^ヲ。無^ニ復煩惱^ヲ。具足忍行^ヲ。於^ニ

諸法性皆悉了知。已得_レ成_ニ於諸佛刹土莊嚴之事。恒常成就念佛三昧。亦能成_ニ就勸_ニ請佛智。能斷種種煩惱諸使。於諸三昧三摩鉢帝遊_ニ戲_ニ其中。亦悉能得_ニ智巧方便_ニ。

其名曰文殊師利童子菩薩摩訶薩。觀世音菩薩。大勢至菩薩。難有菩薩。香象菩薩。不捨擔菩薩。

地藏菩薩。陀羅尼菩薩。放光菩薩。雷音菩薩。分別金光明決定王菩薩。那羅延菩薩。寶才菩薩。

寶印手菩薩。虛空藏菩薩。意王菩薩。意見菩薩。度衆生菩薩。常精進菩薩。常喜根菩薩。破惡道

菩薩。金剛遊步菩薩。三界遊步菩薩。行不動菩薩。不空見菩薩。功德藏菩薩。蓮華德菩薩。如香

象菩薩。得深智辯菩薩。大辯菩薩。法上生菩薩。諸法無疑德菩薩。師子遊步菩薩。散諸恐怖菩薩。

蔽衆諸障菩薩。師子吼音菩薩。非不言菩薩。辯聚菩薩。彌勒菩薩摩訶薩等。爲_ニ上首_ニ。微有_ニ如

是百千菩薩詞薩_ニ俱_ニ。

爾時世尊。在毗耶離大樹林中草茅精舍。時諸國主大臣百官。大富長者婆羅門等。居士人民遠來。

商客。皆悉尊重恭敬奉侍。

爾時彼城有_ニ離車_ニ。名毗摩羅詰。其家巨富。資財無量。倉庫豐盈。不可_レ稱數。四足二足諸畜

生等悉皆充溢。其人有_レ妻名曰無垢。可意端正。形貌姝美。女相具足。然彼婦人於_レ時懷妊

滿_ニ足_ニ。九月。便生_ニ一女_ニ。姿容端正。身體圓足。觀者無_レ厭。其女生時有_ニ大光明_ニ。照其家內。處

處充滿。如是生時大地震動。其家門外所有樹木。並出酥油。自然流溢。毗耶離城一切大鼓及諸小鼓。種種音樂不_レ作自鳴。上徹虛空。天雨衆華。於其宅內四角各_レ有伏藏。自開。微密雜寶皆悉出現。其女當生。不曾啼哭。即便舉手合十指掌。而說偈言。

由昔不造諸惡業。
 若當造作惡業者。
 故由昔斷諸惡行。
 恭敬嚴重所_レ尊故。
 我念往昔迦葉佛。
 我在樓上見_レ彼尊。
 我心既得清淨。已
 爾時現在無_レ香華。
 遂即聞_レ於空中聲。
 慈_レ感一切諸衆生。
 汝欲供養彼尊者。
 今得如是清淨身。
 不_レ生在此大豪貴。
 好施調順不_レ放逸。
 方得_レ生此賢善家。
 乞食來入_レ毗耶離。
 如是見_レ已心清淨。
 供養尊重。彼如來。
 塗香末香飲食等。
 佛於世間不_レ求報。
 是故遊行來乞食。
 當發_レ無上菩提心。

比^{スレバ}於^ニ三界^{ケルニ}設^ニ供養^ヲ
 我^レ聞^ニ如^キ是^ノ空^ノ聲^ヲ已^テ
 遂^ニ發^シ不^レ動^ノ菩^ツ提^ヲ心^ヲ
 住^{トドマ}空^ニ高^サ一^ニ多^ク羅^{ナリ}樹^ヲ
 猶^シ如^シ雜^ニ寶^ヲ須^ニ彌^ヲ山^ニ
 是^ニ時^ニ諸^ノ佛^ノ神^ノ力^ヲ故^ニ
 我^レ時^ニ散^ニ於^ニ迦^ニ葉^ニ上^ニ
 所^ヲ見^ル十^ニ方^ノ諸^ノ佛^ノ者^ヲ
 我^レ見^ル曼^{コト}陀^ノ羅^ノ華^ノ蓋^ヲ
 我^レ時^ニ空^ニ中^ニ說^{ケリ}是^ノ語^ヲ
 修^シ行^ヲ乃^チ至^リ塵^ノ數^ノ劫^ヲ
 天^ノ龍^ノ乃^チ至^リ非^ノ人^ノ等^ヲ
 聞^{キテ}我^ガ如^キ是^ノ師^ノ子^ノ吼^ニ
 我^レ捨^テ三^ニ十^ニ三^ニ天^ヲ已^テ

不^{シト}如^カ信^{シテ}發^ス道^ノ心^ヲ者^{ニハ}
 復^タ見^ル諸^ノ佛^ノ微^ニ妙^ノ相^ヲ
 從^{ヨリ}於^ニ樓^ノ上^ニ墜^レ身^ヲ下^ニ
 復^タ見^ル十^ニ方^ノ一^ニ切^ノ佛^ノ
 迦^ノ葉^ノ佛^ノ身^ヲ亦^モ復^タ爾^ノ
 曼^ノ陀^ノ羅^ノ華^ノ滿^{テリ}我^ガ手^ニ
 卽^チ成^ス清^ニ淨^ノ妙^ノ華^ノ蓋^ヲ
 微^ニ妙^ノ相^ヲ好^シ莊^ニ嚴^ノ身^ヲ
 亦^モ復^タ同^シ如^シ迦^ノ葉^ノ上^ニ
 願^ハ作^リ兩^ニ足^ヲ最^ニ勝^ノ尊^ノ
 不^レ獲^セ菩^ツ提^ヲ誓^{ツテ}不^レ退^セ
 八^ノ部^ノ其^ノ數^ヲ有^ニ二^ニ千^ノ
 亦^モ發^{セリ}無^ニ上^ノ菩^ツ提^ヲ意^ヲ
 還^レ來^シ生^シ於^ニ閻^ノ浮^ノ提^ニ

恒常不_レ失_ニ賢善行_一

我_レ在_ニ三十三天_一時

今生不_レ爲_ニ五欲_一故

我_レ念_ニ宿世諸業報_一

所_レ受神德皆如_レ今

故_ニ勸_ニ汝等修_ニ福業_一

供_ニ養_ニ釋迦牟尼佛_一

唯還供_ニ養_ニ此如來_一

凡_ニ經_ニ八十九處_一生_ニ

智者宜應_レ供_ニ養_ニ佛_一

爾時彼女_レ說_ニ此偈_一已默然_ニ而住_一。其女往昔造_ニ諸善根_一業因緣故_ニ其身自然著_ニ諸天服妙寶衣裳_一。於_ニ其身上_一出_ニ妙光明_一勝_ニ於月照_一。猶如_ニ金色_一耀_ニ其家內_一。然其父母見_ニ彼光_一故_ニ即爲立_ニ名稱_一爲_ニ月上_一。

爾時月上生_ニ未_レ幾_一時_ニ其身忽然_ニ如_ニ八歲大_一。彼女行住坐立之所_ニ其地皆悉光明晃耀_一。身諸毛

孔出_ニ栴檀香_一。口氣香_ニ如_ニ優鉢羅華_一。毗耶離城所有刹利王公子弟_ニ及諸大臣居士長者婆羅門等_一

及餘大家豪姓種族所有童子_ニ遙聞_ニ彼女月上名聲_一端正可意世無_ニ雙比_一。聞_ニ是事_一已_ニ彼等悉皆欲_一

火熾然_ニ心懷_ニ熱惱_一。偏滿_ニ身體_一。一一皆作_ニ如_ニ是思惟_一。願得_ニ彼女月上_一爲_ニ婦_一。爾時一切諸童子

等作_ニ是念_一已_ニ皆悉往_ニ至毗摩羅詰離車之家_一。通_ニ傳_ニ意趣_一進止參承_ニ各各皆許_ニ無量珍寶_一。駝驢象

馬諸財物等_ニ或有共_ニ彼離車_一相見_ニ口憐_ニ云我當_ニ抑奪_一。或有_ニ呵喝_一作_ニ如_ニ是言_一。汝今若不_レ

與我女者。我必劫汝床褥臥具財物。衣裳身諸璽珞一切服飾悉皆將去。或言打者。或言縛者。將如之是等恐怖之事。而以告之。

爾時離車毗摩羅詰心生恐怖。舉身毛豎。憂愁不樂。作如是念。彼等或有以其勢力將欲抑奪我女月上。而將去者。或有欲來奪我命者。然彼離車。失其本念。煩冤懊惱。顰眉皺額。眼目不瞬。而向其女。遂即舉聲啼呼。涕泣淚下。如雨。爾時月上見父如是憂愁啼哭。而問之言。父於今者何故懊惱啼哭。如之此。

爾時離車毗摩羅詰告其女言。汝於今日不可不知乎。爲汝身。故城內一切所有人民。悉皆共我身爲惡結。是故各各欲來爭汝。我今將恐被其勢力劫汝將去。損我身命。及諸財寶。皆喪失。爾時月上即以偈頌報其父言。

假使闔浮大地內
悉各力如那羅延
盡其身力趁逐我
慈心毒仗所不害
不畏死屍諸鬼便
所有一切諸衆生
人人手執利刀仗
彼終不能害得我
水火亦復不漂然
及以呪詛言說者

慈心決定無瞋恨
 我今起此慈心念
 現亦不與他人苦
 厭欲自無有欲想
 我無欲瞋及癡患
 我觀一切諸衆生
 世間但有此慈者
 假使虛空沒於地
 四大海水處牛跡
 慈心畢竟不畏他
 護世猶如護身已
 是故誰當能害我
 成慈亦無悲怒癡
 是故無能害我者
 皆悉猶如父母想
 他人決定不能欺
 及以須彌入芥子
 亦復無能降我身

爾時月上說此偈已白父母言尊者父母若必定有如此事者願於此處毗耶離城四衢道頭振其鈴鐸號令城內一切人民作如是言從今七日我女月上定當出外自求婚嫁。澤澤譯天主汝等一切諸男子等未婚娶者應當各各好自嚴飾衣服璽珞亦須掃除城內街巷布散香華燒香末香及華鬘等悉各備辦堅立寶幢張懸幡蓋如是種種好自莊嚴以如是是等諸種法用諸請父母令作是事爾時父母聞女語已即取其言從家而出依女所

說。即便振鈴徧告。城內一切人民。作如。是言。我女月上。從今日。後至。於七日。當從家出。自求婚嫁。選擇夫主。汝等應當各自努力。莊嚴衣服。掃治街巷。布散香華。燒香末香。悉各備辦。豎立寶幢及諸幡蓋。如是種種好自嚴飾。爾時城內一切人民。聞此語已。心生踊躍。各各自於當家門庭及以街巷。嚴飾壯麗。過上。所陳。

爾時城內。刹利大臣。及婆羅門居士長者。乃至工巧。所有童男。皆悉沐浴。髮澡。浴身體。塗治妙香。各各爭競嚴飾。衣服及諸瓔珞。作如是已。方始復告左右眷族。作如是言。汝等心意不得傾動。莫生餘念。其女月上。若不來。向於我邊者。汝等必須強力助我。而奪取之。爾時月上。至後六日。是月十五圓滿之時。受八關齋。其夜明靜。在於樓上。往來經行。佛神力故。於其右手。忽然有二蓮華。自出。黃金爲莖。白銀爲葉。琉璃爲藥。馬瑙爲臺。其華口有。一百千葉。光明曜曜。妙麗精華。華內有。一如來形像。結加趺坐。身如金色。自然顯現。威光赫奕。明照彼樓。具三十二丈夫之相。八十種好莊嚴其身。彼如來像所出光明。亦復徧照。月上家內。爾時月上。於自右手。忽見華已。瞻仰觀。彼如來形像。歡喜踊躍。徧滿其體。不能自勝。即便以偈問。彼所化如來形像。作如是言。

不審仁者爲天龍

爲是鬼神阿修羅

尊者此身不思議

或復變化黃色身

我於身心無有想

仁者今爲誰所使

不知來意爲何緣

尊嚴顯赫如火聚

爾時彼化如來形像復以偈報月上女言

我今非天亦非龍

師子釋種佛世尊

故非天龍及夜叉

非須輪等八部衆

爾時月上復以偈頌白彼所化如來形像作如是言

爲緊那羅夜叉等

唯願德聚爲我說

猶如金色日天等

忽似頗黎紅縹色

見尊功德大歡喜

未審又從何方來

來已還欲至何所

功德巍巍似須彌

又非夜叉乾闥婆

今遣我來至憍所

非人亦非緊那羅

我真釋種佛使者

爾時彼化如來形像復以偈答二月上女言

仁今所_レ言佛世尊
願爲_レ我說_ニ彼形相_一
又自言我佛法使_ニ
我觀_ニ仁威及神力_一

彼形色體何所_ニ似_一
我得_レ聞已如_レ是思
而不_レ爲_ニ我說_ニ佛相_一
世間無比即如_レ佛

彼尊形體眞金色

能爲_ニ衆生_一作_ニ福田_一

自能覺_ニ知_ニ一切法_一

若上若中若下者

於世間事悉知解

知_ニ諸法_一已達_ニ彼岸_一

於_ニ諸一切衆生_一心

而於_ニ衆生及與心_一

彼因_ニ行施得_ニ作佛_一

具_ニ三十二大人相_一

是故其_ニ名號_一爲_ニ佛_一

又復了_ニ別衆生_一心

是故其_ニ名號_一爲_ニ佛_一

及以了_ニ知_ニ一切法_一

是故其_ニ名號_一爲_ニ佛_一

自心一一能知見

二處俱亦不染著

及能常持_ニ清淨戒_一

又復忍辱及精進
 於世事無不知者
 常懷慈悲喜捨心
 降伏一切諸魔等
 自能覺悟無上道
 彼昔恒常能輪轉
 光明普照千萬利
 諸佛刹土有千數
 廣大舌根能徧覆
 諸佛刹土有千數
 彼出大聲悉徧滿
 諸佛刹土千億數
 一住不動千萬劫
 諸佛刹土千億數

禪定智慧等成佛
 所謂一切諸技藝
 是故其名號爲佛
 名聞震動千萬界
 是故其名號爲佛
 一切諸法無上輪
 常說苦空及無我
 百數億數那由也
 是故其名號爲佛
 其數又如恒河沙
 是故其名號爲佛
 彼尊以手能執持
 是故其名號爲佛
 其刹所有諸須彌

彼尊一毛繫縛已
 聞往諸佛上妙句
 自覺證已能度衆
 自在十力皆具足
 於諸佛法無有疑
 佛無能作灌頂者
 五根五力等圓備
 善持禁戒善共住
 無諂無曲心調順
 佛者恒入諸禪定
 利益衆生說知時
 一切功德悉具足
 具一切智見諸法
 我若經由一劫說

能持行至數億刹
 於法自在度彼岸
 是故其名號爲佛
 又能成就四無畏
 是故其名號爲佛
 五眼成就悉具足
 七覺分道無染著
 寂定調伏最無比
 是故其名號爲佛
 心無暫亂亦無畏
 是故其名號爲佛
 爲諸衆生等供養
 是故其名號爲佛
 或經百數千萬劫

何故其名號佛者

說不可盡故名佛

爾時月上。聞此偈已歡喜踊躍徧滿其體不能自勝。心生渴仰欲見。如來復以

偈頌白彼化像作如是言

我今欲見可得

尊者如是說功德

決應不樂在家住

智者若聞如此法

必定不飲不食噉

我今若不見佛者

及以不坐本床鋪

亦復不樂著睡眠

復聞彼德獲淨意

我見尊者已歡喜

當更發大歡喜心

若對見彼佛體相

經由劫數百千億

佛大丈夫世難聞

彼尊今在何方所

我已聞斯漏盡名

法王今在大林內

所化如來即報言

清淨離垢悉勇猛

其有徒衆數百千

手擎經劫不疲勞

一一能負三千界

爾時月上。執彼蓮華及以化佛。從樓閣上下來。往至父母之邊。到已說偈白其父母。作

得定智慧。辭無礙。神通能至數億刹。供養千萬諸佛。已無有我想及佛想。一切諸想悉無染。汝若欲見彼世尊。聽於微妙諸佛法。父母觀我所執華。又觀無上華中者。如是微妙最勝尊。我今見於徧家內。其身不可徧度量。具獲多聞如大海。一頃徧禮彼諸佛。於一時頃還復來。無有剎想及法想。於諸衆生作利益。及大菩薩聲聞衆。速往彼大導師邊。微妙莖稈金剛色。諸相莊嚴如山王。何人當可不供養。金色光曜母應知。須臾變成種種色。

赤白黃紫及頗黎

大聖瞿曇在大林

父母同往設供養

父母聞已唱善哉

遂辦種種諸香等

月上父母及親眷

無價珍寶及音聲

既嚴備已從家出

我等今須設供養

速執華香及末香

應獲無量諸功德

月上此言大利益

寶幢幡蓋及華鬘

悉著微妙上衣服

種種莊嚴悉充備

欲往大林世尊邊

爾時月上所期之日。六日已過至第七日。時有無量數千大眾。集會俱來。看彼月上。於時衆內或有諸人以欲惱心而來會者。或有因看毗耶離城觀其城上所有莊嚴。却敵樓櫓雀墮窠窓勾欄藻稅諸雕飾事。而來會者。時有無量男女婦女。因涉彼城而看月上。爾時月上仍執彼華。其女父母及其眷族。竄諸華鬘塗香末香種種燒香上妙衣服。寶幢幡蓋種種音聲。左右侍從周匝圍遶。從家而出在於街巷。

爾時月上諸眷屬等出至街巷。如是行時無量無邊千數人衆。見彼月上在於街巷進止行時。

卽詣其所而口悉各唱如如是言。此是我妻。此是我妻。爾時毗耶離大城之內。或有諸人一時走來。出聲大叫。向月上女。是時彼女見其大衆速疾來。故遂卽飛騰在於虛空。高一多羅。仍執彼華。在空而住。以偈白彼諸大衆言。

汝等觀我此妙身。

非下。因昔發欲心。故

棄捨。姪欲如火坑。

能行苦行。調六根。

見他妻妾。不貪欲。

如是當生可意身。

我身毛孔。出妙香。

此非歌心所薰得。

我今本無姪欲心。

今此尊像證明我。

汝等昔或作我父。

猶如真金帶火色。

能得如是微妙身。

及諸世事不染著。

及行清淨諸梵行。

皆生姊妹及母想。

衆人樂見無厭足。

汝豈不聞滿此城。

皆由布施調伏果。

汝於無欲莫生欲。

如我實語。無有虛。

我或於汝昔爲母。

互^ニ作^ス父^ヲ母^ヲ及^ビ兄^ヲ弟^ヲ。
 我^ハ或^ハ往^キ昔^ノ殺^シ汝^ヲ等^ヲ。
 各^々作^ス怨^ヲ讎^ヲ互^ニ相^シ殺^ス。
 非^ズ下^ニ因^リ有^ク欲^ニ得^ル端^ニ正^ス。
 有^ク欲^ニ心^ヲ者^ハ無^シ解^ヲ脫^ス。
 若^シ墮^ル地^ノ獄^ニ及^ビ餓^シ鬼^ニ。
 鳩^ノ槃^ノ夜^ノ叉^ノ阿^ノ修^ノ羅^ノ。
 眼^ヲ睛^ヲ無^シ舌^ヲ跛^シ與^ニ聾^シ。
 一^レ切^ノ種^ノ種^ノ諸^ノ過^ノ惡^ノ。
 若^シ於^ニ來^ニ世^ニ作^ス輪^ヲ王^ヲ。
 大^ニ梵^ヲ自^ラ在^リ諸^ノ天^ノ等^ヲ。
 生^シ盲^シ暗^シ啞^シ失^フ本^ノ性^ヲ。
 象^ノ牛^ノ虎^ノ蠅^ノ蚊^ノ虻^ノ等^ヲ。
 生^シ大^ニ地^ノ主^ノ喜^シ樂^シ家^ヲ。

云^ハ何^ヲ於^ニ此^ニ生^シ欲^ニ心^ヲ。
 汝^ハ等^ハ或^ハ復^シ殺^シ我^ヲ來^ニ。
 云^ハ何^ヲ於^ニ此^ニ生^シ欲^ニ想^ヲ。
 有^ク欲^ニ定^シ當^ニ生^ス不^レ善^ノ。
 是^ハ故^ニ今^ニ須^ク捨^テ欲^ニ心^ヲ。
 及^ビ以^テ畜^シ生^ス種^ノ類^ノ中^ニ。
 卑^シ舍^ヲ遮^ヲ等^ハ皆^ハ因^リ欲^ニ。
 身^ヲ體^ヲ形^ヲ容^ヲ悉^ク醜^シ陋^シ。
 皆^ハ由^リ往^キ業^ノ多^ク欲^ニ心^ヲ。
 帝^ヲ釋^ス三^ノ十^ノ三^ノ天^ノ主^ヲ。
 皆^ハ由^リ廣^ク行^フ淨^シ梵^ヲ行^フ。
 猪^ノ狗^ノ馬^ノ驢^ノ及^ビ駱^ノ駝^ノ。
 皆^ハ由^リ多^ク欲^ニ獲^ル此^ノ報^ヲ。
 豪^ノ富^ノ長^ノ者^ハ及^ビ居^ス土^ノ。

如^{キハ}此^レ皆^{ツチ}因^ヲ行^{スルニ}梵^ニ行^ニ

負^ニ重^ニ責^ニ炙^ニ煙^ニ熏^ニ鼻^ニ

斬^ニ截^ニ則^ニ剗^ニ及^ニ挑^ニ眼^ニ

欲^{セバ}作^{ナラント}緣^ニ覺^ニ及^ニ羅^ニ漢^ニ

自^ニ覺^ニ覺^ニ他^ニ廣^ニ利^ニ益^ニ

行^ハ欲^ハ非^{ズルナリ}唯^ニ一^ニ種^ニ患^ニ

速^ニ望^ニ解^ニ脫^{スルコトヲ}諸^ニ欲^ニ者^ハ

更^ニ無^ニ歸^ニ依^{センヨリ}能^{ハク}拔^ク罪^ヲ

汝^ニ等^ニ速^ニ往^ク彼^ニ尊^ニ邊^ニ

現^ニ得^ニ歡^ニ喜^ニ常^ニ受^ニ樂^ニ

枷^ニ鎖^ニ杻^ニ械^ニ搯^ニ辱^ニ身^ニ

爲^ニ人^ニ僕^ニ使^ニ皆^ニ因^ニ欲^ニ

衆^ニ相^ニ莊^ニ嚴^ニ諸^ニ佛^ニ身^ニ

皆^ニ由^ニ捨^ニ離^ニ有^ニ欲^ニ想^ニ

多^ニ諸^ニ過^ニ惡^ニ無^ニ利^ニ益^ニ

共^ニ我^ニ往^ニ詣^ニ如^ニ來^ニ邊^ニ

唯^ニ有^ニ諸^ニ佛^ニ天^ニ人^ニ尊^ニ

無^ニ量^ニ劫^ニ數^ニ佛^ニ難^ニ觀^ニ

爾^ニ時^ニ月^ニ上^ニ說^ニ此^ニ偈^ニ句^ニ語^ニ諸^ニ人^ニ已^ニ是^ニ時^ニ大^ニ地^ニ皆^ニ悉^ニ震^ニ動^ニ於^ニ虛^ニ空^ニ內^ニ而^ニ有^ニ無^ニ量^ニ諸^ニ天^ニ子^ニ等^ニ揚^ニ聲^ニ大^ニ叫^ニ

儼^ニ弄^ニ身^ニ衣^ニ詠^ニ歌^ニ嘯^ニ調^ニ無^ニ量^ニ無^ニ數^ニ雨^ニ諸^ニ天^ニ華^ニ百^ニ數^ニ千^ニ數^ニ作^ニ諸^ニ音^ニ樂^ニ不^ニ可^ニ具^ニ宣^ニ

爾^ニ時^ニ大^ニ衆^ニ見^ニ聞^ニ是^ニ已^ニ遂^ニ生^ニ厭^ニ離^ニ諸^ニ欲^ニ等^ニ想^ニ生^ニ希^ニ有^ニ想^ニ未^ニ曾^ニ有^ニ想^ニ當^ニ於^ニ爾^ニ時^ニ舉^ニ身^ニ毛^ニ豎^ニ更^ニ無^ニ欲^ニ

惱^ニ無^ニ瞋^ニ無^ニ恚^ニ無^ニ貪^ニ無^ニ癡^ニ無^ニ怒^ニ無^ニ妬^ニ無^ニ嫉^ニ無^ニ諍^ニ無^ニ復^ニ煩^ニ惱^ニ無^ニ有^ニ諸^ニ使^ニ皆^ニ以^ニ歡^ニ悅^ニ潤^ニ澤^ニ其^ニ身^ニ各^ニ

各^ニ互^ニ生^ニ父^ニ母^ニ兄^ニ弟^ニ姊^ニ妹^ニ諸^ニ親^ニ尊^ニ長^ニ等^ニ想^ニ既^ニ捨^ニ一^ニ切^ニ諸^ニ煩^ニ惱^ニ訖^ニ各^ニ各^ニ頭^ニ面^ニ禮^ニ月^ニ上^ニ女^ニ

爾時大衆所執香華末香塗香。華鬘衣服諸瓔珞等。悉將散擲。向於月上。既散擲已。佛神力故。其物在彼化如來上。成一繖蓋。廣半由旬。

爾時月上還從空下去。地四指。足步虛空。經行來往。須臾。即出毗耶離城。欲向釋迦如來之所。爾時月上安足之處地皆震動。而彼大衆其數八萬四千人俱。隨從月上次第而去。

爾時長老舍利弗共五百比丘。於晨朝時。整衣持鉢。爲乞食。故便來向於毗耶離城。時彼聲聞諸徒衆等。遙見月上與其大衆前後圍遶。相向而來。時舍利弗。遂白長老摩訶迦葉。作如是言。長老迦葉。彼所來者是月上女。欲向佛邊。我等且可逆問彼女。隨意義趣。驗試其女。得忍已不。

爾時長老舍利弗等五百比丘。前行。既至月上女邊。到已。告言。汝於今者欲何所去。其月上女即報長老舍利弗言。尊舍利弗。今既聞我作如是言。汝今欲向何所去者。我今亦如舍利弗去。如是去耳。

爾時舍利弗復報月上作如是言。我今欲入毗耶離城。汝於今者乃從彼出。云何報言。我今亦如舍利弗去。作如是去。

爾時月上復報長老舍利弗言。然舍利弗。舉足下足。凡依何處。舍利弗言。我今舉足及下足並。

依^レ虛空^ニ。其女復報^{ヘテ}舍利弗^ニ言^フ。我亦如^ク是^ノ。舉足安足悉依^レ虛空^ニ。而虛空界不^レ作^ハ分別^ヲ。是故我言^フ。亦如^ク尊者舍利弗^ニ去^リ。如^ク是^ノ去耳^ト。尊者舍利弗此^ノ事且然^ニ。今舍利弗行^ニ。何行^ノ也。舍利弗言^フ。我向^ニ涅槃^ニ。如^ク是^ノ行^ニ也。其女復白^ク舍利弗^ニ言^フ。尊者舍利弗。一切諸法豈不^レ向^ニ於涅槃^ニ行^ニ也。我於今者亦向^ニ彼行^ニ。

爾時長老舍利弗復問^ニ月上^ニ作^ハ如^ク是^ノ言^フ。若^シ一切法向^ニ涅槃^ニ者。汝今云何而不^レ滅度^セ。其女報^{ヘテ}言^フ。尊者舍利弗。若向^ニ涅槃^ニ。即不^レ滅度^セ。何以故^ヲ。其涅槃行不生滅^ハ。故^ニ。涅槃行者不^レ可^ク得見^ル。體無^ニ分別^ヲ。無^ニ可^ク滅者^ニ。以^テ是^ノ義^ヲ。故^ニ。行^ニ涅槃^ニ者。即是涅槃^ニ。爾時舍利弗復問^ニ月上^ニ作^ハ如^ク是^ノ言^フ。汝於今者行^ニ何乘^ニ也。爲^{シテ}行^ニ聲聞乘^ニ。爲^{シテ}行^ニ辟支佛乘^ニ。爲^{シテ}行^ニ大乘^ニ。

爾時月上報^{ヘテ}舍利弗^ニ作^ハ如^ク是^ノ言^フ。尊者舍利弗。今既問^ニ我行^ニ何乘^ニ者^ニ。我今還問^ニ尊者舍利弗。唯願^{シテ}如^ク是^ノ隨意答^{ヘテ}我^ニ。如^ク舍利弗所證法^ヲ者。爲^{シテ}行^ニ聲聞乘^ニ。爲^{シテ}行^ニ辟支佛乘^ニ。爲^{シテ}行^ニ大乘^ニ。爾時舍利弗復報^{ヘテ}彼女^ニ作^ハ如^ク是^ノ言^フ。非也月上。所以者何^ヲ。然彼法者。無^ニ可^ク分別^ヲ。亦無^ニ言說^ヲ。非別非一^ニ。亦非^ニ衆多^ニ。

爾時月上報^{ヘテ}尊者舍利弗^ニ言^フ。是故不^レ應^ク分^ニ別諸法^ヲ。一相異相無^ニ別異相^ニ。於^ニ諸相中^ニ。無^ニ有^ニ可^ク住^ル。故涅槃者實無^ニ可^ク滅^ル。

爾時長老舍利弗復告月上ニ作ニ如レ是言一。希有ナリ。希有ナリ。汝今乃能如レ此辯才無レ有ニ滯礙一。是故汝昔曾更奉ニ侍シ。幾許佛ニ來リ。爾時月上報ヘテ舍利弗ニ作ニ如レ是言一。尊舍利弗。今問ニ於我ニ。汝昔曾更奉ニ侍シ。幾許諸佛ニ來リ者ハ。猶如ニ實際與ニ法界一也。

時舍利弗復問レ女言一。所ノ言實際及與法界有ニ幾許一也。女復答言一。如ニ無明有及以愛ニ等一。無レ有ニ異也一。時舍利弗復問レ女言一。無明有愛復有ニ幾許一。其女報言一。如ニ衆生界ニ無レ有ニ異也一。時舍利弗復問レ女言一。衆生界者復有ニ幾許一。其女報言一。如ニ彼過去未來現在諸佛境界ニ舍利弗言一。若レ如此者。汝說ニ何事一。是何解釋一。其女報言一。依ニ尊者問ニ我還依答一。

時舍利弗復問レ女言一。我問ニ何義一。其女答言一。問ニ文字一也。舍利弗言一。彼文字滅ニ無レ有ニ足跡一。其女答言一。尊舍利弗。如レ是滅相一切法中。如ニ有ハ問者ニ如ニ有ハ答者一。二俱滅相不可得也。（卷上）

附記 卷下は、續いて月上女大樹林中草茅精舎の世尊の許に詣り、重ねて舍利弗及び其他の尊者、菩薩等と問答したる後、世尊より授記を蒙り、男子と變成して月上菩薩と號することを述べ。其條の文には、

即時大地皆悉震動。出ニ大普聲一。雨ニ天華雨一。出ニ大光明一。徧照ニ世界一。爾時月上菩薩。即住ニ彼空一。以レ偈歎レ佛作ニ如レ是言一云々
とあり。

解 說

解

よく引かれる詞であるが、源氏物語「繪合卷」に、

「まづ物語の出で來はじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせて爭ふ。」

と見えてゐる。古い物語中の材料、場面を畫にした所謂物語繪を左右から出して勝負を爭ふ其の取組をいつたのである。そして竹取の方は、

「繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之書けり。」

説

としてある。紫式部の時代に斯く物語の始祖と目してゐたのであるから、先づやはり之を所謂昔物語（此の語については、日本文化講座第一巻に説いておいた。）の最古のものとしておいてよいのであらう。さうしてそれ以後の物語で亡佚したものが随分多いのに、此の「出で來はじめの祖」の竹取物語が、今日傳存してゐて我が小説史の源泉、搖籃時代の物語の形態を明示してくれてゐるのは、眞に興味深く、嬉しく、感謝にすら値すると言ひ度いのである。

新

「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬つの事に使ひ

けり。名をば讃岐造磨となむいひける。」

といふのが書き起しである。少し國文學を知つてゐる人なら直ぐに氣がつくが、「今は昔」といふ冒頭が、今昔物語——その名稱の由つて來る所が亦其處に在る——や宇治拾遺物語と全く同じである。「Once upon a time」である。「Es war einmal」である。「昔々、或所に爺と婆とがあつたとさ」の御伽噺と何等擇ぶところは無いのである。今昔物語などを引くるめてなら、所謂説話的な文學と呼ぶべきであるが、竹取物語は其の中でも、童話的形態と内容とを殆ど完全に近い程に包持してゐる小説である。つまり製作童話であると言へる。但し讀者として明らかに兒童の目を目ざしてゐるのでない事は言ふまでもない。成人のもつ童心に、或は兒童と目しての成人に、話しかけてゐるのである。否、兒童と成人との境目を隔ぎつてなどといふ意識は、判然とは恐らく作者自身にも發らなかつたのであらう。古代人の心理、古代の小説といふ上からは、寧ろ當然の事である。併し一面からしたものが生れるに他の理由もある。無論彼等には成人の詩や文はあり餘る程あつた。日記でも漢文で堂々と記した。が、「女もしてみむとて」と土佐日記の筆者が和らげて書いた所謂假名文で綴られた物語の讀者は、少くとも形の上では、自然婦幼が中心として豫期せられねばならなかつた筈である。男性の大人達も各、讀者の一人となつて、支那的儀容生

活に取り縛られた間隙を裕くつろげて、私かに自分の故郷に歸つた時のやうな心安さと懐かしさと、親しさと歡びとを見出しつゝ、打興したに違ひない。貫之が假名文の文學的日記を書いた心持も、つまりはそれではないか。而も、そしてやはり前述の理由からしても――素材としては、童話的、少くとも説話的なものが必然に擇ばれなければならぬ以上、形態も表現も童話的であるに不思議はないのである。かうして古代小説は、中世の御伽草子並びになほ後世の落語と、種々の點に於て共通したものを有してゐるのである。

巻頭の數行をなほ讀み續けてゆくと愈々それは鮮明に出てゐる。前に掲げた文を承けて物語はいふ。

「その竹の中に、本光る竹一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。翁いふやう、『われ朝毎夕毎に見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり』とて、手に打入れて家に持ちて來ぬ。妻めの姫おんなに預けて養はず。美しきこと限りなし。いと幼ければ籠かごに入れて養ふ。

竹取の翁この子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔ててよ毎に、金ある竹を見つゝること重なりぬ。かくて翁やう／＼豊になり行く。」

竹の中に光り躍いてゐる美しい小さな女の兒、掌に入れて歸つて、籠の中に入れて育てるといふのからもう純然たる童話である。拾ひ手と拾はれ手の性こそ同じでないが、桃の中かり躍り出した丸々の強い男の兒と、何れは同じ御伽の夢の國の種族である。丈こそ二寸伸びたれ、足駄の下から「物申さん」と呼ばはる愛敬者に先づは劣らぬ芥子人形振りである。随つてこれが引受け手はやはりお爺さんと一對の親切なお婆さんでなければならぬ。翁が此の子を獲て後、金の竹を見つけるやうになつて、次第に有福になつてゆくのも、童話式である。「子になり給ふべき人」といふのは、翁の職業柄「龍りゆうになり給ふ」と洒落れたのである。翁の馴な輕さを想見する一方、我等は上品な古代の落語家を其處に見出す。そして此の言語上の機智的な洒落は、此の物語に一貫して屢々、特に數箇の或小説話に纏まつた各段落の結末には、大抵いつも附せられてゐる。無論中には、上品とは言へないものもあるし、又かなり苦しい牽強けんきやうもあるが、燕の子安貝えんのかいを採らうとして大失敗を演じた上に、生命まで賭けてしまふ結果になつたのを、

「思ふに違ふ事をば、かひなしとはいひける。」

又、それを憐んで、流石に姫の心も少し動いたのを、

「それよりなむ、少し嬉しき事をば、かひありとはいひける。」

などは、先づ自然で上出来の部であらう。結尾の「不死」「富士」の結びつけ工合も、あれ位なら許されてもよからう。少くとも氣分に於て嫌味が無いから。

餘り早く物語の結末に來過ぎてしまつた。もう一度前へ還らう。

此の物語は一名をかぐや姫の物語とも呼ばれてゐる。前に引いた源氏の「繪合卷」には「竹取の翁」とあるが、同じ源氏の「蓬生卷」には「かぐや姫の物語の繪にかきたるをぞ云々」と見え、てゐる。かの竹の中から獲た女兒は、慈、美しく生立つて、家の内は其の耀き出る光に滿ち渡つてゐた。「なよ竹の赫映姫」といふ名がつけられて、これから姫は小人國の世界を出て、人間社會との接觸が始まる。翁はもう立派な有徳人となりすましてゐた。姫は打出の小槌の力を借りずに、人間竝に大きくなつて、世界のあらゆる異性を魅惑するに足る程艶麗な年頃の女性美を發揮してゐた。之を取卷いて型の如くの妻争が開始せられ、就中熱心な五人の貴公子達に、最後の解決を與へる爲に、姫の希望でそれ／＼試みの難題が課せられる。

一人一人づつ説話が片づいてゆく。第一の報告者は——そして無論失敗者は——「天竺の佛の御石の鉢」を所望せられた石作皇子である。持參した匱の鉢を看破せられて、門に棄ててからもなほ頼みをかけた一首の厚顔しさを、

「かれ鉢を棄てて又言ひけるよりぞ、面なき事をば、はぢを棄つとはいひける。」

といふのが、例の作者の落の附け振である。

第二は車持皇子、詠へた通りの「蓬萊の玉の枝」が目の前に差出された時には、さしもの姫も胸が潰れた。眞しやかな皇子の漂流譚に翁は頻りに感激した。妬ましいやら腹立たしいやら、困じきつた姫の氣の毒な様子、勝誇つて縁ににじり上る皇子の圖々しさ、それを「ことわり」と同感して、早やそゞくさと奥を片づけ始める翁、而も作物所の匠等が驅込願に詭計の底が忽ち割れて、笑み榮える姫、居たゝまらぬ皇子、それに

「竹取の翁然ばかり語らひつるが、さすがに覺えて眠り居り。」

説

といふ掌返す現金さは、中でも一番面白い。

「火鼠の裘」の右大臣阿倍御主人、「龍の首に五色に光る玉」の大伴御行の大納言、「燕の持たる子安貝」の中納言石上麻呂と姫をめぐる一群の公子連の、難題が絡んだ妻争の渦巻の一つ／＼が、滑稽な悲哀の記録となつて、替る／＼競争圏外へ投げ出されて行くところに、童話的な興味は愈々十分である。最後の人物が成功せぬのは、まだ説話の大切な終末が残されてゐるからで、而も石上中納言のみが、五人の中で姫に少し同情を寄せられるのは、其の愚直の性格と憫むべき

死にざまとに由るのではあるが、所謂末子成功説話の形を普通取つてゐる末の者の勝を語る童話心理におのづから合致する心持が、變つた姿で現れてゐると看る事が出来る。

此の童話味はずつと終まで續いてゐる。けれども後半は稍それは稀薄になつて、今度は傳説的な空想が漸く濃くなつて来る。戀の獵師達の狙ひは、各自確かなつもりでも、いつもの的を外れた。最終の射手は長くも時の帝であつた。併し、御狩にことよせての行幸も、目にもとまらぬ影と身を隠す怪しの姫が振舞に、空しく御輿を還されねばならなかつた。人間の戀は結局皆失敗であつた。かくて人の世の戀物語は竟に作り出される事無しに、かの戀の對象は、驚異の眼をみはる地上の人々を後に、急に手にも取られぬ天上界のものとなつてしまつた。武士共の弓箭も用を爲さなかつた。育ての親の翁夫婦が血の涙も引留め得なかつた。彼女の眞の父母の家は、仰ぐも遙けき月の都、なよ竹の姫は風早の三保の松原に降り來て舞の袖を反した天つ少女と同じ御空の天人の群の一人であつたのである。天の羽衣、不死の靈藥、下界の淹留、月宮からの迎、支那式神仙譚と佛教的思想とが一つになつて、傳説的色彩を濃厚にしてゐる。竹取物語が寫實小説(“Novel”の譯語としての)と區分する立場から、屢傳奇小説(“Romance”の譯語としての)と呼ばれる事のあるのは、此の後段に於て名實共に相應してゐる。前段は傳奇的分子も含まつてはゐるが、

童話としての性質が勝つてゐる。全作品としては、一箇の藝術童話としての取扱を受ける方が寧ろ妥當であると思ふ。(素材としての一部に民間童話的分子が採入れられてあつたとしても、それは玆では別問題である) 唯前にも言つたやうに、嚴密な創作意識の下に生れた所謂 "Kinder-Märchen" でない事だけは、これも亦否定し難い事實である。成人の爲の藝術童話、やはり古代の御伽草子である。そして中世の數多くのそれに比して、却つて藝術値の高いものとして眺めらるべき作品である。

此の物語の素材となつた主な傳説的要素に就て、三四述べてみると、先づ(一)竹取翁といふ名前に關しては、萬葉集卷十六の竹取翁が九箇の仙女と逢うての唱和の歌と、説話上の直接交渉は無いがやはり何等かの——少くとも名稱上の——關係はあると思はれる。(二)竹の中から子供を生れる奇談、それは廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品、佛說緣(奈)女祇(耆)城因緣經、佛說奈女耆婆經、或は華陽國志、後漢書西南夷傳などに本據を求めようとしてゐるのは、契沖や小山儀や田中大秀等此の物語の研究者達であるが、同時にこんな植物から出生する説話は、又世界の諸國に求め得る童話乃至特に英雄出生傳説の一の説話型である事も注意せねばならぬ。特に大秀の竹取物語解に引いてゐる華陽國志の竹王や、契沖の河社に引いてゐる西南夷傳の竹夜郎などは、

單に竹から男兒が生れたといふだけの類似に過ぎず、同一異傳である此説話は、私は寧ろ我が桃太郎の童話と關聯せしめて考ふべきものと信ずる。少くとも直接には竹取物語に關係してゐないものと考へる。却つて佛典特に月上女經が全説話の構想に多少の影響を與へてゐようとの幸田露伴博士や、近くは山岸徳平氏（雜誌國語と國文學 昭和二年五月號）やの意見は面白いと思ふ。（三）五人の求婚者の妻爭は、内地の先進傳説よりは、祇域因縁經の七國王が梵兒の女を爭ふのに近い、少くとも類型をなす説話と言ひ得る。これは明らかに七王中の一人が成功するのであるが、竹取には其の代りに難題のモチーフが含まつてゐて愈々童話的條件を具備してゐる。（四）天女の昇天は漢武内傳を出典とする藤岡博士（國文學史 平安朝篇）、月上女經を擬する山岸氏がある。いづれも傾聽させられるが、他に嫦娥傳説や、大秀の引いてゐる日本靈異記の大和の漆部造麻呂が妾の昇天説話も間接には參考になる。又丹後風土記の白鳥處女説話なども影響せなかつたかを保し難い。其の發生の時代は明白でないが、天女を養つて子とした翁の富貴になるなどは、類話である。但し直接交渉の有るか如何かは定め難い。（尤も、仙女と婚して富貴になるのは、媒女でも朝鮮の羽衣傳説でも、此の種の説話に珍しくない型である。）（五）富士と不死の通俗語源説的解釋から發生した傳説が此の物語の結末に材料を與へたとす高木敏雄氏の説（比較神話學）は採りたくない。前に言及したやうに、他の各小段の終に附した滑稽な言語の遊戲の一と看るだけで十分

であらう。富士神仙説は別に在つたとしても、不死の藥と若し結合して來たとすれば、寧ろ本書からの事であらう。

其の他、その不死の藥や、佛の御石の鉢や一々の部分的素材の典據の穿鑿に就ても、先哲は腐心してゐるが、茲に説くのを認めぬ。特に大秀の「男せざりし人」の例話の考證などは聊かの外れて滑稽に墮せんとさへしてゐる感がある。

唯是非一言を費して置かねばならぬのは、小異の他、此の物語と殆ど全く同じ内容を有する説話が、今昔物語（卷三）に收載せられてゐる事である。藤岡博士は此の物語の方が古く、それを節約して收めたものだと言論じてをられる（平安朝鑑）。斷定を下すに猶多少の餘地があるやうでもあり、別に民間傳説が在つて、一方は今昔に收録せられ、一方は竹取の作者に小説化せられたとも考へられない事もないが、今昔のそれを通して推知し得る形が、餘りに本小説と近接し過ぎてゐて、製作説話から出たと観る方が自然のやうな點が多いから、猶博士の考が妥當かと思はれる。

但し、節約して收めたと言ふよりは、竹取の作者によつて作り出だされた此の物語が、既に今昔物語集の成つた時代までに、あんな形に傳説化してゐたと言ふ方がもつと自然ではあるまいか。

又、釋由阿の詞林采葉抄（卷五）や、源光行の海道記（古くは鴨長明巡歴記と謬り呼ばれてゐた。

采葉抄にも、平安朝篇や比較神話學にも、其の名で引かれてゐる。にも此の説話は載つてゐるが、これこそ更に後に傳説化したもので、前者は本地物の形をとるに至り、後者は鶯姫の物語になつてゐる。何れも帝とのローマンスが中心となつてしまつてをり、前者には坂上田村麿まで登場させられた。國名風土記のも鶯姫であるが、これは愈ゝ地方的、民俗的口碑の姿に變つてゐる。

要するに素材としての種々の類話を、古傳説や外國説話中に斷片的には檢索し得るが、竹取物語の作品としての興味と創作値とは、説話としての是等の材料との比較にはなくて、是等の材料が如何に作者自身のものになつてゐるか、作者自身のことばで語られてゐるか、そして如何に時代生活そのものと一になつて我々の眼前に展げられてゐるかに在らねばならぬ。

出來上つた竹取物語について眺める時、其處に紛れもない平安朝生活の姿が、はつきりと浮出てゐる。戀の遊戲をい^{のち}とする當代貴族生活の實寫にさながらに接し得る。少しばかりのたばかりや財^{たから}や地位や家びと共を所有してゐる事によつて、己れの偉大さ優越さを信じようとし、又信じてゐる憐むべき人々が、飽くまでも自らを守るに恰^{まさ}しい、而も常に異性に對して自己の存在を忘れさせまいとする一女性から、自分達の力についての脆い幻想を見事に打壞られて、切實に眞摯なほんたうの人間に還らしめられる事を、讀者と共にのおのづから要求せられるところに、

時代相の皮肉が宿つてゐる。作者の豫期しなかつた事ではあらうが。

解

説

姫をめぐる一群の中には、人間の種ならぬ御方をも數へる。否、狩の行幸に託せて造磨が山本の家を訪らひ給ふ帝すらも、畏れ多い事ながら、「み寵持ち、み御串持ち」て「榮摘ます兒」に、「家聞かな、名告らさね」と、うちつけに宣ふ泊瀬朝倉宮に天の下しろしめしし天皇の御姿ではないか。引田部の颯が花蓮と盛りであつた童女の昔も眼に浮ぶ。平安朝とはいへ、未だ初期である。奈良朝以前から續いて來てゐる上古の氣分が、なほかなり此の物語に漂つてゐるのは怪しむに足らない。かの五人の中の右大臣阿倍御主人、大納言大伴宿禰御行、中納言石上朝臣麻呂は、いづれも實在した人物の名を借りてゐる。官職まで然りである。御行は贈右大臣、麻呂は左大臣にまで歴任し、三人の中では最も遅れて、養老元年三月に薨じた。石作、車持も名だけは假空ではない。(車持皇子を藤原不比等なりとする竹取物語考の加納諸平の説は泥んでゐると思ふ。彼は此の物語を史實に關聯せしめて眺め批判しようとしたが爲に此の過誤に陥つたのである。)兎も角作者が、昔時の實人物の名によつて、物語に眞らしさと興味とを増さうとしてゐる用意は窺はれる。そして實生活に觸れようとする態度と共に、物語の——小説の將來の——寫實的傾向を暗示してゐると同時に、亦上古の史實と傳説とが分離せず境界が模糊としてゐた名残を留めてゐる

といふべきで、此の點でも古代小説の鼻祖として、記紀や風土記から物語文學へ推移し展開して行く過程を示すものとして當然の現象と看られ得るのである。

更に女主人公かぐや姫は、小智や官位や權威や、そんなものの一段上に立つて、自分で自分を弄ぶのを知らずに集ひ來ては入れ替る多くの男性の惱ましく躍り狂ふ痴態を、自己の美しさに關する満足な誇りを感じながら靜に冷やかに笑ましげに眺めてゐるところ、正に平安朝の思ひあがつた女性達の性情の一面と、此の時代に於ける彼等の社會的地位とが具體化され又誇張されてゐるのではないか。而も彼女は地上の爛肉に汚されるには餘りに高く淨い蒼穹の靈光である。醜い現實は如何に理想に近い頂點に達しようとも、到底現實である。理想は、至美は、聖なる愛は、竟に永遠に天上のものである。併し、かうした平安朝生活の中心生命ともいふべき戀のたはむれ其のものについて、甚だ無關心であるやうな姫も、やはり暖い涙は有つてゐた。純真な愛の持主ではあつた。養ひ親との別離に堪へ得ない女らしい子としての感情は、又あやにくな帝の御志におのづから牽かれ寄る優しい心であり、子安貝を拾はうとして身を贅にした最も正直なそして弱い石上中納言に對してのみ「少し哀れとおぼ」させた同情である。天の羽衣を身に著けるまでは、月の宮人にも人間の血は通つてゐた。さうして帝にのみは「御返事流石に憎からず聞え交し」、且

その「天の羽衣著るをりぞ君を哀れと思ひ出で」たところに、なほ皇室尊崇、おふけなき身の譽を畏み嬉しむ我が國民性の美しい一面が映つてゐる。又女主人公の住居が賤しい老夫婦の家である事が、これからの小説が殆ど全く宮廷貴族社會中心になつて行くのに對して、萬葉の生活からの推移をも語つてゐるかの觀があるのも面白い。

さて、竹取物語の作者は此の面白い説話を、超自然的な空想と現實的な氣分を縋ひませる事によつて彩りながら、愉快さうにきび／＼したことばで語り續けて行く。そして其の物語を一層面白く印象させる爲に、語り方にをかしみを附加する手段を採つてゐる。これはかうした童話のもの、乃至は小説の初期のものには當然な現象であらうが、内容の滑稽（但しそれは事件上の偶然の失敗や無智から生ずる反豫期の滑稽が主で、僅に竹取翁の上に多少の滑稽的性格が賦與せられてあるのを看る。それは眞摯な滑稽であるのが、例へば月の都からの迎へ人を引掻いてやらうなどと力む邊りにもよく表されてゐる。）の他に言語上の同音異義の滑稽が多く用ゐられてゐる事は前に述べた通りである。そしてそれは此の作者獨特のものではない。古今集の俳（誹）諧歌と同趣味である。土佐月記の中に挿入せられてゐるそれと同じ滑稽でもある。特に此の言語の洒落が各小段の終に附いてゐるのが、此の物語の形態上の一特色であると共に、各獨立小説話が又そ

れぞれ歌で終る形の上に、此の物語が構成に於て、抒情詩の流れを直接承けてゐる事を示し、所謂歌物語と密接な交渉を有つものである事を語つてゐる。そして内容に於ては前代の柘枝の仙女や浦島子の奇譚に連接して、固有と外來と、所謂三國の思想と習俗と説話的分子とを巧に融合させ、表現の様式に於ては、記紀萬葉から源氏への一轉期を最も鮮かに劃して、而も立派に成功してゐる。部分的には昇天の段の敘述など特にすぐれてゐる。玉の枝や子安貝の段などいい。

「繪合卷」の藤壺中宮の御前での争ひには、宇津保に負けた。併し、作品としての價値は果して宇津保の下位に置かるべきであらうか。「物語の出で來はじめの祖」としてのかぐや姫の物語は、單純な統一をもつ、素朴で簡勁な筆致の中に軽いユーモアの流動してゐる明るい美しい短篇の傳奇小説である。藝術童話である。稚くとも完からずとも、なほ懐かしく可愛い我が小説史の搖籃である。私は源氏以前の小説としては、先づ此の物語を取りたい。(さうして此の竹取物語の童話味とユーモアの更に延長し進展した姿を、私は源氏物語の「玉鬘卷」に於て看るのである。事實、構想上にも詞章上にも竹取が範を垂れてゐることは確に否むことは出来ない。そして大夫の監けんの滑稽に於て、かなり性格的に一步を進めてゐる點が紫女の手腕であらねばならぬ。)

此の物語、作者は不明(源順といふ傳説は誤であらう)、創作の年代は延喜以前説が普通で、も

つと限定しては弘仁以後（弘仁以後といふのは、物語中の「頭中將」の官職設置の年時に據つての推定で、竹取物語新釋の春山頼母、井上頼文兩氏の説）などとも言はれてゐる。兎もあれ、伊勢物語と相並んで平安時代初期を記念する名作品である。

島 津 久 基

昭和十四年六月十五日 第一刷發行 竹取物語
昭和二十八年九月十五日 第十六刷發行 臨時定價四拾圓

校訂者 島津久基

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿區市ヶ谷加賀町一丁目三番地
村尾一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

落丁本・亂丁本は
お返替いたします

大日本印刷・永井製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。譬ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大衆生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂熱は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を擁護するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の資務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき真に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうろはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫新刊・近刊書（七月・九月）

既刊二〇〇點 股後復刊一三〇〇點

文庫定價 昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

〔解説目錄御希望の方は最寄書店にお求め下さる〕

錦里文集 前編 木下順庵著 ★★

木下一雄校譯 ★★

宗祇發句集 星加宗一校訂 ★★

今昔物語集(三) 丸山二郎校訂 ★★

日和下駄 他四篇 永井荷風作 ★

夜行巡查・外科室 他五篇 泉鏡花作 ★★

良人の自白 續篇 木下尚江作 ★★

秋立つまで 他三篇 嘉村磯多作 ★

世紀兒の告白 下 小松清譯 ★★

ここに薔薇ありせば ヤコブセン作 矢崎源九郎譯 ★

天路歷程 第二部 竹友漢風譯 ★★

嘘から出た誠 岸本一郎譯 ★

千一夜物語(十一) 豊島・佐藤譯 ★★

追憶 下 瀧浅芳子譯 ★★

ベルツの日記 第二部上 トク・ベルツ編 菅沼龍太郎譯 ★★

ユダヤ人のブナの木 ドレスデ・ユルス編 飛匠谷英一譯 ★

カザノヴァ回想録(四) 岸田國士譯 ★★

サハリン島 下巻 チェーホフ作 中村誠譯 ★★

ウジェニー・グラन्द 水野亮譯 ★★

100

未開社會の思惟	上下	レヴィ・リユル著 山田吉彦譯	★★★
コモン・センス		トーマス・ペイン著 小松春雄譯	★
抽象と感情移入		ヴォリンゲル著 草薺正夫譯	★★
三浦梅園集	三枝博音編		★
織工	ハウプトマン作 久保榮譯		★
提督日本遠征記(三)	玉城謙雄譯		★★★
ベルリ			★★★
エナフ文學的回想第二部	井上滿譯		★★★
三國志	第二册 小川環樹譯		★★★
トーノ・パンゲイ上	ウエルズ作 中西信太郎譯		★★★
改譯 ローマ神話	上下 野上彌生子譯		各★★★

☆ 近 刊 ☆

赤繪のない繪本	光 齋藤茂吉作	★★
阿呆物語	語上 望月市恵譯	★★★
ドストエフスキ妻への手紙	下巻 谷 耕平譯	★★★
改文學史の方法(附作)	家論 瀧沼茂樹譯	★★★
栽培植物の起原上	加茂儀一譯	★★★
連歌論	集上 伊地知輝男編	★★★
南蠻寺門前	他四篇 木下李太郎作	★★★
和泉屋染物店		★★★
ブルターク英雄傳(四)	河野與一譯	★★★
藝術と革命	他四篇 北村謙男譯	★
思 い	出上 杉 捷夫譯	★★
唯心論と唯物論	鍋山信一譯	★★

